
七つの鍵の物語 - 【守護者】 -

上野文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七つの鍵の物語 - 【守護者】 -

【Nコード】

N6676N

【作者名】

上野文

【あらすじ】

王国暦1110年。

世界の覇権を狙うナラール国は発掘兵器を奪取すべく、近隣のガートランド王国に工作部隊を送り込んだ。

異世界から迷い込んだ少年、赤枝基一郎は彼らの引き起こすテロルに巻き込まれてしまう。

各国の思惑が交錯し、数多の工作員が暗躍する中、少年は生き残るために抗う。

第一話 白衣の研究者は教科書を読む

第一話 白衣の研究者は教科書を読む

1

英雄にして国父たるユーリ・オールドマン大元帥様は、幼き頃から聖者としての徳と軍神の威風を備えられていました。

ご幼少のみぎり、大元帥様がお母様とある小学校をお尋ねになられたことです。

教室に飾られていた大陸地図は、栄えある我らのナラール国と、憎くきガートランド王国が同じ赤い色で塗られていたのです。

憤りを感じられた大元帥は、筆で王国を黒く塗りつぶされました。すると、驚くべきことが起こりました。

王国の空が真っ黒になって、稲光がさし、雷が轟いて、長い間、激しい夕立が降り注ぎました。

この時から、人々は、偉大なる指導者ユーリ・オールドマン大元帥様は、空と大地をも自由に動かされる偉大な才能をお持ちであると讃えました。

「……っ。……ぶっ。ぶわはは!!」

『しゅうち、こくご』とナラール語で書かれた教科書を手にした女性は、乱雑なガレージの床に山と積まれた資材の上で、耐えられないとばかりに笑い始めた。

額に巻いた黒い油染みの付いたタオルが落ちて、短く刈られたとび色の髪と、活動的な光を帯びた茶褐色の瞳が露になる。

機械油で汚れた白衣が隠す豊かな胸をゆらし、細いお腹と腰をよ

じるように転がって悶絶すると、彼女の服に刺さっていたペンやら足元のスパナやらが、五月雨のように床へと落ちてきた。

「ジェニファ・ポプキンス警視正。何を笑っているんだ。危ないじゃないか？」

『警察庁公安部外事二課第8資料管理倉庫』——白地に黒

文字で書かれたプレートのかかったドアをくぐり、資材置き場に入ってきた少年は、足元に突き刺さったコンパスやら釘抜きやらを見て、思わず眉をひそめた。

「だってっ。キイチロウ。天候をも自在に操る魔術師だぞ？」

まるで、流星雨を呼び、万軍を撃ち滅ぼす、伝説の黒衣の魔女^{テラー}みたいじゃないか。

そんな力があるなら、是非見てみたいものだ」

赤枝基一郎。この世界では見慣れぬ厚手のコートを羽織り、黒い綿パンツとスニーカーを履いた少年は、奔放な女性のはしゃぎぶりにこめかみを押さえる。

「あんな詐欺師と一緒にされちゃ、世界を滅ぼした伝説の魔女も泣いて悲しむだろう。

国語だけじゃない。道德、社会、全ページが差別語と不道德の塊だ」

赤枝は内ポケットから眼鏡を取り出し、敷き詰められた鉄パイプや金属板をひよいひよいと踏み越えながら、白衣の女性が居るガラクタ山のとっぺんへと登り始めた。

「社会教導の37Pを開いてくれ。こう書かれている。

祖父は孫に尋ねました。

『お前は大きくなったら何になりたいんだ？』

『はい、僕は軍人になって王国の豚どもを全員殺したいです』

『そうか、お前はいい子だ』

祖父は満面の笑みを浮かべて孫の頭を撫でました。」

「っひ、ははっ。ははっ。実に不道德な社会教導だね」

よほどに教科書が笑いのつばに入ったのか、まったく色気を感じさせない荒い息を吐きながら、二十代の半ばを越えた女性が、お腹を抱えてゴロゴロと転げまわっている。

「算数の教科書21P例題8。

『勇敢なナラール兵が10人の極悪な王国兵を攻撃し、5人を殺した。逃げた王国兵は何人でしょうか？』

人の命をなんだと思ってるんだ？ こんなふざけた教科書は、俺だってそんなに見たことが無い」

「ブラックコメディの秀作じゃないか。編者にチップをはずみたいね」

踏み込むたびに足の裏に伝わる金属片の感触。さびた鉄の奏でる不調和音。

ああ本当に酷い喜劇だと、赤枝は唇を歪める。

「ブラックコメディというなら、もっと面白い逸話を知っている。

ガートランド王国という国は、こんなことを教えている国に何の抗議もしないばかりか、国内のナラール学校で本国に準じた教材を使うのを認めているんだ。

その上、税金を免除したり、助成金を出したり、大学の受験資格まで認めている。挙句の果てに授業料まで無償化しようって動きもあるそうじゃないか？

いったいぜんたい、王国の教育はどうなってるんだろっな？」

「そんなこと、私に怒られても困るよ」

ようやく落ち着いたのか、とび色の髪を手櫛で整え、茶褐色の瞳に涙を浮かべて、肩で息をつきながら、グラマーな女性は苦笑気味に笑った。

「外務省と文部教育省、市長や市議会に言ってくれ。予算を決めるのは、議会であって、私たちじゃない。王国はこれでも、民主主義

の国だからね」

「民主主義、ね」

赤枝はようやく、資材の山の頂上へと辿りついた。

女性の隣に腰を降ろし、入り口からは見えなかった『山の向こう側』を眺めた。

そこには、バラバラにばらされた『巨大な人型の何か』があった。背骨は鋼鉄、臓器は内燃機関^{エンジン}、血管はパイプで、肉体もまた種々の金属板の集合体だ。

人を模して作られた玩具。魂なきヒトガタ。

そう考えた瞬間、首のはずされた人形の瞳が、血のようにあかい真紅の視覚素子が、赤枝を『見た』。

(違っ)

ごくりと生唾を飲み込んだ。

そうではないのだ。

アレは生きている。魂を、己の意思を持っている。

赤枝の知る世界ではどれほど非常識な事でも、この世界ではそれが事実だ。

不意に、何もかもが崩れていくような悪寒を感じて、赤枝は孤独におびえる心を叱咤するように、思わず憎まれ口を叩いていた。

「何もかもが遅くて役立たない、できそこないの政治機構だ。

ジェニファ・ポプキンス警視正。

民主主義なんてものは、どこの世界でも無能な衆愚政治の代名詞だよ」

煽るような言い方だった。だから、かちんときたのかもしれない。紅をひいた唇を、ほんの少しだけとがらせて、ジェニファは否定した。

「むう。拗ねた言い方をするなあ。

私には、君の好きな『共産主義』とやらが、むしろナラールの政治形態に近いと思えるぞ？」

おそらくジェニファは意図しなかっただろうが、その感想は赤枝の腹に据えかねた。

「世襲を認めた共産主義なんて、俺の世界には存在しない。

国家『もどき』のどぐされテロリストどもがいるだけだ」

共産主義が万民を等しく幸せにする思想と定義するならば、あの国家もどきが掲げたチュチェ思想、頂点に立つ”ただひとりを幸せにするため”万民に無条件の忠誠と犠牲を強いる『主体主義』は、その真逆に他ならない。

「あまり人を悪く言うもんじゃない。

確か君が元の世界で支持していた政党は、その下部組織と随分懇意にしていたそうじゃないか？」

「ふん。どこだってやってることさ。

俺の世界じゃ、あんたが好きな『民主』って二文字を看板に吊るした政党が、堂々とその下部組織から献金を受け取って、パーティー券をばらまいてる。

他の政党だって怪しいものだ。権力をもつ奴はどいつもこいつも腐ってやがる」

「キイチロウ」

ジェニーが赤枝の顔を正面から見た。

肩を抱き、眼鏡越しに黒い瞳を茶褐色の瞳に映し出す。

彼女の顔に映る赤枝の顔は、酷いものだった。

三つ編みに編んだ長髪にはつやがなく、頬は土気色、唇はばさばさだ。

ただ血走った瞳だけが、彼の執念を伺わせる。

「そう焦るな。君は必ず、君の故郷の仲間達を見つけられる。」

だから、そんなに、自分を追い詰めなくていい」

「追い詰められてなんてない。俺は帰るんだ。

政治汚職ばかりのあの国へ。環境汚染で潰れそうなあの世界へ。皆揃って。必ず、必ずだっ」

ジェニファ・ポプキンスは、まるで幼子をあやすように、赤枝の背を撫でさすった。

一人異郷の地で、生きているかも分からない同胞を探す。その不安、その心圧はどれほど重いことだろう。

自分だけが綺麗な場所に立ち、他の全てを批判するのは自身の悪癖だと、目の前の少年は理解していた。

世界すべてを悪と弾劾し、自分だけが正しいと声をあげるなら、世界すべてから悪と弾劾されても文句は言えない。

それでも、まだ子供なのだ、この少年は。有り得ない綺麗な理想に胸を焦がすほどに。

ミスガルズという大陸がある。

浮遊する人工の大陸を除けば、この世界に唯一つ残された、人が住む事が可能な地上大陸だ。

千年前、あらゆる邪悪に心を染めた黒衣の魔女とその下僕たるモンスターによって、9つの大陸は次々に海へと沈められた。

魔女は、宇宙の根源であり、あらゆる願いを叶える世界樹へいたる虹の門を開こうと、最高位の神器である七つの鍵を集めたのだ。

そして、世界樹へ至る寸前、最後の鍵である炎の神剣を授けられた勇者によって討たれ、世界は救われたという。

俗に『^{ラグナロク}神焉戦争』と呼ばわれる伝説である。

異説は多く、ガートランド王国では、勇者は、初代国王である『

救世王』エレキウスが見出した盟友とされているが、他国では違った形で伝えられ、時には神の子だったり、異世界からの来訪者だったりもする。勇者がどこの国の生まれなのか、神剣を誰に授けられたのか、なぜ黒衣の魔女を討ったのか、伝承は星の数ほど多すぎて、今では真相などわからない。

されど千年を経てなお、確かな事があった。遺跡から現れて民里を脅かすモンスターの存在と、そこで発掘される現代の魔道技術では再現不可能な超兵器”アイティファクト契約神器”の存在だ。

この世界では、魔術の才能を持つ人間はルーン文字を使うことで、意思の力で物理法則を歪め、世界を書き換える事ができる。

指先にともし火を灯し、わずかな風を吹かし、ひとしずくの水を生み出す。それは、常人では奇跡ともいふべき”力”の発現だ。

だが、遺跡からさまよい出るモンスターは、そして人間と契約を結ぶ事で力を振るう「知性ある武器である」インテリジェンス・ウェポン契約神器は、人間の魔術師とは比較にならないほどの規模で、世界を書き換える。

翼竜の吐き出す魔術の炎は町一つを消し飛ばし、巨人機と呼ばれる巨大なヒトガタの契約神器は、長大な槍でその翼竜すら叩き伏せる。

そういった希少な神器の存在は、各国で秘匿され、1000年の歴史の中で、決して表舞台に立つ事はなかった。

しかし、百年前、大陸西方の雄、西部連邦人民共和国の考古学者ルガナン^{II}ゼファノスによって、遺跡の奥深くに眠る、新しい契約神器が次々と発見された。以来、各国を巡る状況は一変する。

あらゆる国が戦略兵器となりうる神器を求めて、各地に散らばる神話の時代の迷宮へと軍を進めた。

繰り返される軍拡と張り詰めてゆく国家間の緊張……。

幸運にも古代兵器の発掘に成功した国の中には、傲慢かつ無法なテロ行為へと手を染めるものもあった。

ナラール国。

同胞であるナロール地方と争い、分派した全体主義先軍国家。

国家主導者の無能から軍事費と指導部の遊興費に予算の全てをつぎ込んだ最貧国は、”アイディフテクト契約神器”の存在と、政治的パトロンである西部連邦人民共和国の軍事力を盾に、各国から民間人を拉致し、麻薬や覚せい剤を売りさばき、あまたのテロリスト集団に武器を卸すという、大陸の平和を脅かす最低最悪の暴挙を続けていた。

ガートランド聖王国。

世界で最も古い王家を戴く東方の国家。

長らく続いた平和から専守防衛を謳った憲法を制定し、その結果、王国に敵意をいだく他国による領空領海侵犯にも警告しかできなくなってしまう平和ボケの国。

だが、そんな王国も、ナロールによる度重なる民間人略取の被害を受け続け、ついには拉致被害者を奪還すべく、一石を投じようとしていた。

2

大陸東方の経済国家ガートランド王国と、大陸西方の巨大軍事国家西部連邦人民共和国の間には、『大断崖』と呼ばれる天然の空隙が存在する。

『ラグナロク神焉戦争』の爪あとと伝えられる”それ”は、天を貫く巨大なむきだしの山と、地の底まで続く深い地割れが幾重にも重なっている。天候と地脈の異常から、人力による踏破は勿論、飛行や転移魔術によって越えることすら叶わない、絶対の壁。この『大断崖』の存在ゆえに、王国と共和国は陸戦による全面戦争が不可能となり、幾度かあった戦争の多くは海戦によって行われた。

だが、まったく無かったわけではない。

両国がぶつかるとき、陸戦の通路となるのが、『大断崖』に面し

た北のナラール地方であり、また南のナロール地方だった。地政学的に東西を結ぶ重要な拠点であるがゆえに、ナラール・ナロールの地は狙われた。『神焉戦争』以来、王国に併合されたわずかな期間を除いて、この地は保護者面した西部連邦人民共和国の代々の政権によって踏みにじられた。

ナラール・ナロールを治める王は、西部連邦人民共和国の使者を迎えるたびに土下座して床に頭を打ち付けて出迎え、数千人の女奴隷や農作物を貢がされた。

千年の属国……。歴史に残っていない『神焉戦争』以前を含めれば、より長いかもしれぬ陰惨な忍従の歴史。それゆえに、彼らは”西部連邦人民共和国でない”仮想敵を必要とし、史書や史物が残す「本来の歴史」ではない、「あるべき歴史」を必要とした。

ナロール国では、五千年前にはナロール国が西部連邦人民共和国の領土の大半を支配し、王国を打ち立てたのもまたナロール人であるという歴史が史実となっている。

王国は、ナロール人が「恵んでやった」ゴミのような文化をうやうやしく受け取り、繁栄したにもかかわらず、武力で以ってナロールの地を焼いて、ナロール人が受け取るべき正当な繁栄を強奪したのだと。

冷静になって、王国共和国間の文化交流の通路（ストーリー役）になっただけで、恵むも何も独自の文化なんてなかったのでは？とか、そんなに凄い文化だったのに、何で王国相手に瞬殺されるのよ？とか、粒ぞろいの英雄、文化人を輩出したとか言うわりに、残ってる名前がテロリストくらいしかないってどうよ？とか、有名なサクセスストーリーで「医学に長じた女官が功績を称えられ、王の妾となることを許されました」って、それって出世じゃないやん、どんな酷い歴史……。とかツツコミを入れてはいけない。ナロールでは、真実の歴史に気づいては、生きてはゆけないから。

そついうわけで、ナロール国では、ある程度以上のお金を得たり、海外に留学したりすると、そのまま海外に出てナロール国には帰ら

ない。ナロール国の知的人材やら、財産やらは流出の一方で、国はどんどん傾いてゆく。

愚かだ。——そう、ナロール国中尉、キリル・フラムチェンコフは、仇たる同胞を嘲笑う。

過去の歴史が恥辱に満ちている？ だから、偽りの歴史を教え込み、自慰的な快楽に酔う？

それは結構。だが、そんなもので満足できるのか？ だから南の奴隷階級は愚かなのだ。王国も、共和国も、その手でねじ伏せて支配してしまえばいい。

輝く未来の前には、過去など何の意味を持つだろう？ 王国人も、共和国人も、ナロール人も、偉大なるナロール人のエリートたる自分に跪き、靴を舐める。

新世界では、王国と共和国の輝かしい歴史こそ、真なる華、ナロールを称える添え葉となるのだ。それだけの『力』が、”契約神器アーディファクト”には在る！

「我らナロールの黄金なる未来の為に、貴様らのような反政府主義者は邪魔だ。わが聖剣の錆となれ！」

ナロール軍によって追われ、『大断崖』へと追い詰められた反政府活動家たちを、キリル・フラムチェンコフの駆る、巨大な黄金の翼と剣をもった白銀の巨人が狩り尽くす。

一部の者は、裏市場から購入したらしい十数体の青銅巨人ゴーレムに乗り込んで、がしやがしやとボウガンを構えたが、……遅すぎる。

まるで止まっているようだ、キリル・フラムチェンコフは、細い目と彫りの深い顎を歪めて笑った。

共和国との国境にある山から吹き降ろす風と、大断崖から吹き上げる風に煽られるように、赤土の大地の上で、三体の青銅巨人は四

肢を断たれて吹き飛んだ。

彼らには、何が起こったのかすらわからなかっただろう。白銀の巨人が右手に構えた黄金の剣。その刀身が、輝きを発しながら、十二に分かたれ、360度全方位から斬り込んだのだ。

黄金の翼をはためかせて飛ぶ白銀の巨人には、青銅巨人の放つ矢などかすりもしない。

白銀の巨人は、常人には認識すら不可能な超絶機動で青銅巨人を翻弄し、破壊する。

決して傷つくことなく、ただ邪悪なる剣のみを折る様は、まさしく聖剣！

「……………」

そんな白銀の巨人による一方的な処断劇を、近くの禿山から、一人の少女が見下ろしていた。年の頃は未だ10に足らずで、硝子人形めいた面差しはあどけない。少女は、亜麻色の髪と細い肢体を白いローブに包み、虚ろな青灰色の瞳に戦場を映しながら、小さな両の腕で灰色熊のぬいぐるみをだいて、山間を渡る風になぶられるまま、無言で立ち尽くしていた。

山肌に立つ少女の姿を先に視界にとらえたのは、追われるゴーレム達の方だった。彼らは砂糖菓子を前にした蟻のように、あるいは天上から降りる一本の糸を見つけた地獄の虜囚のように、口々に人質にしると叫びながら、幼い獲物を目掛けて殺到した。

「イス力。準備を——」

か細い腕に抱かれた灰色熊のぬいぐるみが、否、ぬいぐるみに宿る契約神器アーティファクトの意思が、戦闘の開始を告げた。

盟約者たる少女のわずかな肯きに呼応するように、ぬいぐるみの背の糸が解れ、無骨な黒い金具が飛び出した。ボルト、銃身、マウント、弾倉、それらは瞬時に組みあがり、主の身の丈を越すほどに長大な一丁の狙撃銃を完成させる。銃に似つかわしくないぬいぐるみは、背の解れを短い前足で器用に編みなおし、銃身にしがみつい

たまま、観測手としての役目を全うする。

「標的まで距離1000。1時方向より30N^{ナット}の風、障害多数。拡散氷結弾の使用を進言します」

「ベル。……だいじょぶ、だから」

イスカは、首を横に振った。必要ない、と。

彼女の持つ対物狙撃銃の有効射程はおよそ2500m^{メルカ}。特製の25m^{メリメルカ}の徹甲弾は多少の障害などものともしない。薄い岩壁を溶けたバターのよう^{ゴーレム}に切り裂いて、青銅巨人の装甲に風穴を空けることだろう。

この契約神器こそは、少女がかつて師事した、一人の冒険者から与えられた大切な贈り物。相棒にして…

「これから行動を共にする以上、我がほうの力を見せることが必要です。弾丸は惜しまずに。頑張りましょう、イスカ」

イスカにとって頼れる保護者、だった。

「……ん」

ゴーレム達が迫ってくる。都合、七体。彼らは、少女が銃を所持していても、怯えはしない。

誰が信じられる？ いたいけな少女が、自身の体重よりも重い狙撃銃を、立ったまま構えるなど。

反政府主義者達は、彼女が銃を扱えないと疑いもしなかったし、幼子を盾に使うことになんら良心の呵責を覚えなかった。

「おい、この娘を殺されたくなければっ」

小さな四肢を引きさかんばかりの勢いで、巨大な鋼の腕を伸ばす青銅巨人達。……ここに、反政府主義者達の命脈は尽きた。

イスカは、本来ならば伏せて撃つだろう超重量の長銃身を迫る脅威へ向けて、引き金をひいた。接近していたゴーレムが三体、たった一発の銃弾に胴と腕と肩を貫通されて転倒する。けれど、これはまだはじまりに過ぎない。

「怒りの日。」

その日は、ダビデとシビラのよげんのとおり
世界が灰にかえる日です

審判者があらわれて

すべてが厳しく裁かれるとき

その恐ろしさはどれほどでしょうか」

反政府主義者達にとっては、悪夢だったろう。

「くしきラツパのひびきが、かくちのお墓から、あらゆる者を玉座
の前にあつめるでしょう。

つくられたものが、裁くものに、いいひらくためによみがえる時、
死者も生者もおどろきふるえるでしょう」

次々と対物狙撃銃から撃ちだされる、蒼く輝く魔術文字を刻み込
んだ弾丸は、首元や脇下といった装甲の薄い箇所を的確に撃ちぬき、
コックピットを操縦者もともに氷室へと変えた。

「書物がさしだされるでしょう。

すべてが書きしるされた、この世をさばく書物が。

審判者がきたる時、隠されていたことはすべて明らかにされ、罪
をのがれるものはありません。

その時あわれな子羊は何を言えば良いのでしょうか？ だれにかば
ってもらえば良いのでしょうか？

ただしい人ですらおののくさばきの時に」

反政府主義者達の悪夢は終わらない。

弾丸に刻み込まれた魔術文字は組み合わせあって魔法陣を形成し、
青銅巨人達を内部から乗っ取るように魔法陣の一部に組み込んだ。
刹那の後、数百の魔法陣は蒼い閃光を発して連鎖爆発を起こし、

反政府主義者達とその乗機を氷の柱へと変えてしまった。

「救われるべき者を救われる、おそろべきみいつの王よ、あいをたたえる心の泉よ、お救いください」

遣されたのは、もうもうとけぶる冷たい霧と、荒涼たる赤い大地に立つ墓石のような氷柱の群れだけ。

「やすらかなねむりを（エイメン）」

（もう少し、ですね……）

灰色熊のぬいぐるみは、銃身の上で千年前の戦いに思いを馳せた。金色の髪の中神に抱かれた長銃（自分）と、赤毛の青年が持つ杖（姉）が、戦場で向き合っている。神がかった狙撃の腕を持つ盟約者と、圧倒的火力で友軍を屠った宿敵は、いくども戦場であい見え時には味方として、多くは敵として銃弾と砲撃を交わした。かつての盟約者が、宿敵に劣っていたとは思えない。撃ち倒せなかったのは、自身の「契約神器」^{アーティファクト}としての非力ゆえだ。

（姉様。……今度こそは、負けない）

破壊せねばならない。あの裏切り者を。あの契約神器あればこそ、『神焉戦争』で盟約者と創造主は破れ、すべての邪悪を押し付けられたのだ。許せるはずなどありはしない。断罪し、贖わせねばならない。

「共和国の殺戮人形か。良い性能だ」

白銀の巨人が、轟音と共に少女の前に降り立った。

油断なく、黄金の剣を向けて、随伴兵たちに指示を飛ばす。

「生存者は手足を折って連れてゆけ。死者は腹をさばいて、吊るしてさらせ！」

「……」

悲鳴が荒野に響きわたり、赤黒い血がびしやりと大地を濡らした。イスカはただ黙って、硝子のような目で惨劇を見つめていた。ベルゲルミルが見ていられないとばかりに抗議の声をあげた。

「捕虜と戦死者には尊厳をもって接するべきでは？」

「フン。墓を掘り返して鞭打つのが共和国の流儀と聞いているぞ」

……否定できない。こと敗者への蹂躪という点において、共和国の闇の深さはナラールの非ではないのだから。

イスカはたしなめるようにベルゲルミルの背を撫で、銃をおろして敬礼した。

「あなたがキリル・フラムチェンコフ大尉？ 共和国からきたイスカ・ライプニッツです」

「そうだ。ナラールが誇る”聖剣”。偉大なる勇士、キリル・フラムチェンコフとは私のことだ」

白銀の巨人の頸部が開き、黒髪を脱色して金色に染めた、細い眼の青年が身を乗り出した。

銃身に腰掛けたぬいぐるみと視線で火花を散らし、値踏みでもするかのようにイスカの小さな体躯をねめつけた。

「……フン。知っているぞ。紅い道化師の性奴隷、ヴァイデンフュラーの殺戮傀儡^{マイダール}。さぞかし主人に可愛がられてきたのだろうな」

「もう一度、その汚い口をっ」

「ベル……だめ」

イスカは、そつとぬいぐるみの首筋を撫でる。

ベルゲルミル。彼女のアーティファクトに宿った意識は、聡明ではあるのだが、少々血の気が多いのが玉に瑕だ。

「あいさつに……きたの。」

キリル・フラムチエンコフ大尉。

共和国前主席教主マルティン・ヴァイデンヒューと、ナラール
国元帥ユーリ・オールドマン元の命により……アナタの王国行きに
同行します」

「ほう。慰安人形風情が、ナラールの栄誉あるアーティファクト奪
取計画に参加すると？ いったい何のために？」

「王国をうちたおし、大陸にあたらしいちつじよをきずくために…
…」

第二話 来訪者は未知に迷う

第二話 来訪者は未知に迷う

3

発端は数ヶ月前に遡る。

どうしてこんなことになったのか、赤枝基一郎にもわからない。学校からの帰り道、いつもの交差点を、いつもの仲間達と歩いていて。

覚えているのは、黒いトラックの巨体と、白いライト、重く、鈍いブレーキ音。

有り得ないのだ。

カーブミラーは確認済みだった。

排気音も聞こえず、道路の振動もなく、気配すら感じられなかった。

まるで湧いて出たようなトラックに、赤枝たち演劇部の七人は跳ねられて、目を開ければ、そこは”異世界”だった。

何かの冗談だと思った。

赤枝の体は、事故の衝撃にも関わらず傷一つ無くて、先ほどまで歩いていた裏通りとは似ても似つかぬ風景に、ただ一人で取り残されていたのだから。

西洋風の木造建築が立ち並び、石畳の道路を古風な馬車が駈けてゆく。

見慣れない髪、肌の、瞳の、人間達が歩道を闊歩して、看板の文字は読めず、地図を探しても滅茶苦茶だ。

言葉も通じない、お金なんて使えるわけがない。

赤枝は捜し求めた。仲間の姿を。

日本大使館、日本企業、どこでもいいから、助けを求められる場所を。

走って走って、足が棒になるほどに走り回って、赤枝の藁をも掴むような希望は、どこにでもあるような建設現場を見て、完膚なきまでに粉碎された。

「誰か嘘だと言ってくれ……」

木材を手作業で運ぶ国もあるだろう。重機で吊り上げるのは一般的だろう。

だが、身長5m近い巨大な金属製の人形に乗り込んで運び、建物を組み上げるなんて聞いたことがない。

「ははは……」

赤枝は笑った。

笑うしかなかった。

こんな国が、地球上に存在しているはずが無い。

人形は結構な数が普及しているらしく、道路の石畳をひっぺがしたり、橋の支柱を支えていたり、縦横無尽に活躍していた。

鉄道の客車や貨物車らしい窓付きの箱を牽引するのも、四つ足の獣のような人形だったし、消防車や救急車らしいサイレンを鳴らして走るのも、そういった小型の獣人形に引かれた車だった。

コンクリートではなく石を敷き詰められた歩道、丁寧に埋め込まれた街路樹、排気ガスがないせいかな、空気は酷く澄んでいた。

「石炭も、石油も消費しない社会だって？」

有り得ない。燃料電池が実用化されて、プルサーマル（原子力循環機関）計画が完全に成功したとしても、そんな社会機構は作れない」

赤枝は、納得せざるを得なかった。

ここは、日本ではない。

未来にも、過去にも、こんな風景は存在しない。

夢でもなく、時間を跳躍したのでもないならば、物理法則や基礎観念とでもいうべき、世界常識が異なる「どこか」へ吹っ飛ばされた。

言葉も通じず、一銭も無く、常識すら疑わなければならない「世界」に、ひとりぼっちで立っているのだ。

赤枝基一郎は、眼鏡を外した。

鞆から眼鏡拭きを取り出し、曇りをぬぐう。

手持ちの食料は、菓子包みが少し。

所有する衣服は、学生服と上着のコート。

他には教科書と”資本論”他、マルクス著作の文庫本が数冊。

これだけが、この世界を生き抜くための道具。

眼鏡を、掛け直す。

「皆生き延びるよ。俺がじきに、迎えに行つてやる」

赤枝基一郎の執念は凄まじかった。

生きるためには銭おかしが必要になる。

金を稼ぐには、働かなければならない。

が、働こうにも言葉は通じず、身元を証明するものは無く、社会機構についても無知では、雇ってくれる場所が無い。

泥棒は避けたかった。この世界にも警察のような、治安機構はあるだろう。

日本ならまだいい。

犯罪者の人権にも配慮し、無用な暴力は振るわない。

たとえ有罪になつても、刑務所は、中国や韓国の犯罪者から『天国』と揶揄やゆされるほどに規律と環境が整っている。

おかげで、” 外の世界 ” では生きられないと、軽犯罪を重ねて戻ろうとする犯罪者も多く、社会問題になっているほどだから。

では、アメリカなら？ 運が悪ければ、万引き一つでも命が危うい。ヨーロッパ諸国の警察機関にもやはり問題はあるし、ロシアだったら冗談で済まない。南アジアや南米だったら、金が無い時点で命取り。中東、アフリカ、こっちも遠慮したい。

こんなわけのわからない世界では、犯罪行為はそれだけで命取りになりかねないのだ。

（我が身になって、隣国から日本に犯罪者が大量流入してる理由が理解できたな）

警察白書では、日本における外国人犯罪検挙数のうち、中国籍と朝鮮・韓国籍が長年不動のワンツー・フィニッシュを決めている。

本国に比べ、隣国の罰則が緩ければ、犯罪者だって嬉々としてやってくるだろう。

「言葉と文字を覚えなきゃ、死んじまう」

道端のごみ箱を漁り、まだ食べれそうなパンのようなものをかじりながら、基一郎は覚悟を決めた。

……が、覚悟だけでどうにかなるほど、異世界での生活は甘くなかった。

なにせ「 異世界 ” 和辞典 ” なんてものは存在しなかった。

人名らしきものから推測するに、どちらかというと、この国の言語は、ラテン語から英語に近い発展をしたらしい。

だが、発音が違う上、単語や意味も大幅に違うため、基準として考えるのは早計だった。

更には、防寒を兼ねて拾った、新聞らしきものの文字が理解不能だった。

どこのアラビア語かというくらい、意味不明な線の羅列が綴つてある。

もしも赤枝に、オカルト的な趣味があれば、くずれたルーン文字に似ていると想像できたかも知れない。

とはいえ、彼は無神論者の上、そういった趣味は無く、手がかりは得られなかった。

（なるほど、犯罪を迫られる気分というのは、こういうものか）

雨を避けながら、赤枝は郊外にある海岸線へと歩き続けていた。いわゆるホームレスやストリートチルドレンにだって縄張りがある。

町中はそういった集団の抗争もありえるため、危険だと判断したのだ。

食うや食わずの生活がもう三日目。

睡眠不足と疲労から身体中の筋肉が悲鳴をあげて、腹は鳴りっぱなし、頭痛が早鐘のように響いている。

正常な判断力が失われてゆく。

ほんの少しドアを叩き破って、食料を奪えばいい。

ほんの少し暗がりですりかかると、金と服を奪えばいい。

それだけで、今の悲惨な状況からおさらばできるのだ。

（いやなこった）

絶対に必要な手段ならば、迷うことなく実行する。

だが、“それ”は違う気がする。

他に手段があるのに、最悪を選ぶわけにはいかない。帰るのだ。元の世界に。

だから、自分で自分を貶めるような真似はできない。

「大丈夫だ」

赤枝は左手で学生鞆を掴み、ゆっくりと右拳を握り締めた。熱狂的な共産主義者だった両親が、なぜ幼い息子を空手道場にやったのかはわからない。

だが、そこで習った精神は、技術以上に赤枝の根幹に根付いていた。

空手とは、人を殴る力を学ぶのではない、己を律する強い心を学ぶのだ。

歩き続けると、昔は社宅だったのだろう寂れた木造のアパートと、その前にある、申し訳程度に作られた公園が目についた。

赤枝は、腐食しかけた木製の遊具の中に潜りこみ、毛布代わりの檻褸切れを身体にまとった。

今夜の夜露はどうにか凌ぐことができそうだ。

これだけ綺麗な環境なのだ。海にたどり着けば、魚や貝が取れるだろう。

そうすればきっと、いいアイデアだって浮かぶはずだ。

「明日はきっと……」

意識が闇へと落ちてゆく。

だから、カンテラの光が目を刺して、5・6人の集団が自分を取り囲んでいる事に気づけたのは、幸運だった。

逆行で顔は見えない。

誰もが角材やら棒切れやらを手にして、剣呑な雰囲気をもとっていた。

ドスのきいた声で、何かを言っている。

赤枝は遊具の中から出ようとしたが、出口は回り込まれていた。用件は、出ていけではないらしい。

「ご同輩かよっ……」

ああ、なぜ忘れていたのだろう。

夜、人目につかない場所なんて、追いはぎには最適じゃないか。言葉がわからなくても理解できた。

リーダー格らしい男が、荷物と金を寄越せと脅しつけている。

「悪いが、俺は、無抵抗主義とは縁のない性格なんだ」

財布から硬貨を取り出し、右掌に握りこんだ。

喧嘩の手段としては褒められたものじゃない。

だが、黙って殺されるわけにはいかない！

「！！！」

声にならない咆哮をあげて、赤枝は地面を蹴りこんだ。

追いはぎの頭は、驚いたように角材を振りあげ、横薙ぎに振るってくる。

一撃を、背をかかめることで回避する。

遊具を飛び出しながら、がらがらの鳩尾に肘を叩き込み、勢いのままに顔面を殴りつけた。

暗闇にしては上出来だ。歯を数本叩き折ったらしく、追いはぎは血反吐を吐いて転倒する。

そのさまを見て呆気にとられたか、ランタンを持ったまま立ちすくむ、見張りらしい男の胸板に、正拳突きを叩き込んだ。

くの字に折れる追いはぎの髪を左手でひつつかみ、顔面に膝打ち。鼻のひしゃげる感触と悲鳴を聞きながら、投げ捨てた。

「~~~~~」

「っ」

赤枝は、痛みを奥歯でかみ殺した。

背後から角材で殴りつけられ、熱い衝撃を背中に感じた。

めったうちだ。

奇襲から快復した追いはぎたちは、容赦なく棒ツキレを叩きつけてきた。

額から血がだくだくと流れ、こみ上げる痛みと空腹に吐きそうになる。

それでも、赤枝は殴りかかる。

話の通じない悪党相手に降伏はありえない。

情けを請えば、翩り者にされるだけだ。

今生き延びる道はただひとつ、打ち倒すことのみ。

「~~~~~」

「どけよっ」

振り下ろされる棒きれを半身をずらして回避、空いた敵の顎を狙って拳を繰り出すも、距離が足らずに外れた。

視界が揺らぐ。スタミナ切れだ。空腹と疲労が仇になった。

殴るよりも蹴る方が距離は長いが、複数人相手の乱戦で足を止めれば、ボコにされて終わりだ。

「~~~~~!!」

「死なない。死んでたまるかっ」

赤枝はコートの下に、ゴミ箱から拾った雑誌と布切れを巻きつけていた。

防寒を意図したものだだったが、幸いにもある程度の衝撃を受け止めてくれていた。

でなければ、とうの昔に倒れている。

1対6で、二人を戦闘不能に追い込んで、残りは四人。

勝機は薄い、諦めるわけにはいかない。

「~~~~~」

怒声をあげて殴りかかってくる追いはぎの一人に、掌に握りこんだ硬貨を投げつける。

もはや赤枝の身体は死に体だ。息はあがり、足に力は入らず、構えを取る余裕すらない。

それでも、戦う。

どんなわずかな活路でも見出して、生き延びる。

左肩に棒切れの直撃を受けながら、ヘッドバットを眉間に叩き込み、腹部を角材で挟まれながら、敵のわき腹を蹴り上げた。

（ヤバい。持たないか）

でも、もう体力がもたない。

もんどりうつて赤枝は転倒し、追いはぎたちは歓声と怒声をあげて殴りかかってくる。

しかし、トドメはこなかった。

誰かの太い腕が満身創痍まんしんそういの赤枝を抱きとめていたから。

木造アパートから次々と、別の男達が飛び出して、追いはぎたちを包囲していた。

屈強な者、細い者。着ている服もまちまちで、少し汚れていて、でも皆等しく追いはぎたちに敵意の視線を向けていた。

よくやった。そう、言われた気がした。

（ここは、彼らの縄張りで。追いはぎは敵対していて。俺は……彼らの仲間と間違えられたのか？）

委細はわからない。

本当に追いはぎだったのかもしれないし、グループ抗争に巻き込まれただけかもしれない。

ただ、こう思った。

（ああ、これでやっと、眠れる……）

そうして赤枝の意識は、穏やかな闇へと落ちていった。

3

王国暦1110年。紅森の月10日目。

ビッグセントラル州にある、会館で、紺のスーツを着こんだジェニファ・ポプキンスはあくびをかみ殺していた。

『在王国ナラール・ナロール人の参政権についてのシンポジウム』

と垂れ幕の掛かった壇上では、講師として招かれた市民団体の代表が、唾を飛ばしながら熱弁を振るっていた。

ガンガンと机を叩き、拡声器も割れよとばかりにドラ声を張り上げる。

「皆様もご存知の通り、在王国ナラール・ナロール人の政治参加について考える際に、よく障害にあげられるのが、国旗と国歌です。

しかしながら、ともかく王国の象徴だから嫌いだというような理由では、ちよつと情けないのではないでしょうか？

王国人でも「国旗・国歌」は嫌だという人はいますし、逆のことを言えば、在王国のナラール・ナロール人の中でも、白地に紅の獅子を描かれた王国の国旗を掲げて、軍艦マーチかけながら走っている人もいます。在王国のナラール・ナロール人が右翼団体をやっているケースも少なくありません」

（というより、右翼団体のほとんどがアンタ達でしょうが）

短く切ったとび色の前髪の下、眠気でひつくきそうな目蓋をどうにかこうにか開きながら、ジェニファは内心でツツコミを入れる。

理想主義者のコドモが騙されやすいサヨク団体ならいざ知らず、今どき街宣右翼なんて誰もなりたがらない。

では、誰がなるのか？

政治団体という看板を欲しがるヤクザや暴力団、自作自演で被害者を演じたいサヨク主義者、そして不法滞在中のナラール・ナロール人犯罪者などだ。

公安の調査では、右翼団体の大半がそういった王国人犯罪者とナラール・ナロール人で構成されていることが明らかになり、対応に頭を痛めていた。

まあ、一昨日は左翼団体で、昨日は右翼団体、今日はN G Oで、明日はN P Oという日替わりの市民活動家も多いから、いまさらと言えはいまさらだが。

市民団体代表の演説はいよいよ熱が入り、会場いつぱいの来訪者もいよいよ興に乗っている。

「我々マイノリティーのイメージを変えるためにも、私は国籍法を生地主義に改めて、二世以降は。系王国人になるように、王国人の概念を拡大して、”王国人”イコール”王国の血や文化、精神を継承するもの”にならないように変えていこうと思います。一世世代についても、三年ぐらいで市民権的な権利を持てるようにしていくのが肝要です」

（むう。ひとの国でやらんでも、アンタ達には自分の国があるじゃないか……）

あまりに身勝手な言い分に少しだけ目が覚めた。

周囲のナラール・ナロール人達は興奮状態だ。そうだと盛んに相槌を打っている。

「実際問題として、我々が王国国籍をとることになるとガートランド王家の問題をどうするのかという人がいますが、外国人がたくさん王国籍を取ったほうが、早く王家は潰れると思います。

といいますのは、この先もほとんど外国系市民が増えます。ある統計では、一〇〇年後には五人の内三人が外国系になるといいます。そうなれば、王国では純粹王国人がマイノリティーになるのです。

だから、私はあと一〇〇年生きて、なんとしても王国人を差別して死にたいです。

これが私の夢なのです！」

会場は熱狂的な熱気に包まれていた。

そうだ、それこそが我々の夢だ。

王国を乗っ取ろう。この国を我々の新しい約束の地に！

「二年後の州議員選挙に、私は夢を叶えるために王国籍をとり、選挙に打って出ます。

どうか、我々の夢を叶えるため、熱い支援をお願いしたい」

どこの祭りかというほど盛り上がった会場から出ると、秋の風が肌に沁みた。

一緒に会場に入ったナロール人の友人、サラが紙コップ入りの黒豆茶を売店で買ってきてくれた。

会場の近くにある道沿いのベンチに二人で腰掛けると、秋の涼やかな風にあてられていた熱気が冷まされてゆく。

「ごめんね。ジェニー。急に動員がかっちゃって。サクラ、いらなかったみたい」

「ん、気にしない。気にしない。」

政治にこうゆうのはつきものだって。

で、どうすんの？ あのオッサンの言うとおり、あんたも帰化する？」

ジェニファの問いに、サラは困ったように眉をひそめ、黒い茶を一口すすった。

「特別永住権をもつナロール人は、税金とか色々優遇されてるから。選挙権は欲しいけど、あたしは今の生活も捨てたくない。」

王国人になってしまったら、働きながら生活保護ももらえないんでしょう？」

「生活保護は、本来働けない人への救済措置だからね」

だったら嫌かも、とサラは呟いた。

「それに、ちょっと怖いんだ。」

ああいう風な理由で帰化する人が増えたら、きっといつか王国人はナロール系の帰化人を、そういう風な目で見る気がする。

ジェニーも今日の演説、いい気はしなかったでしょう？」

「そりゃ、私も王国人のはしくれですから」

「だから、あたしはまだやめておこうかなって」

ずっと、今の生活が続けばいいのにね。そう、サラは続けた。

（だけどね、サラ。貴女の今は、本当は不公平なものなんだよ）

王国に滞在する外国人の中で、ナラール・ナロールだけが法外な恩恵を受けている。

王国人の公民権など吹き飛ばすような過剰な恩恵には、合法的なものもあるが、政治献金による汚職や、右翼・左翼団体の政治的圧力を駆使した、違法、脱法的な要素も十二分に含んでいるのだ。

いつか、王国人が、「王国人同様に」ナラール・ナロール人が法律を守ることを求めれば、その瞬間にナラール・ナロールのコミュニケーションには激震が走るだろう。

（その時、現場に出るのは私か）

どこの国籍だろうが、友人には変わらない。

サラが悪人でない事を知っているジェニファは、その「いつか」が来る前に、サラが法律を守り、自分の足で立つようになることを望まずにはいらなかった。

それから、たわいのない話を続けていると、手提げ鞆からぴりぴりというベルの音が聞こえた。

「あら？ 呼び出しだわ。ちょっと待ってて」

名紙型のカードをサイドポケットから引き抜くと、中央の液晶画面に、緊急を意味する暗号が映されていた。

7年前に製作され、『ポケットベル』と名付けられたこの商品は、コミュニケーションツールとして爆発的に普及した。

試作品がただの呼び出ししかできなかったのが、数桁の数字を送れるように改良され、ついには文字すら送れるように進化した。

ジェニファにとって思い返すのもおぞましい、開発に協力していたある男は、「数年以内に異なる通信媒体にとって代わられるだろ

う」と不吉な予言を残したが、見事に外れて、ちゃんと今も通信媒体の花形だ。

高位の魔術師や『神器と契約した盟約者』ならば、水晶を使って通話などという離れ業も可能だろうが、そんな能力者なんてほとんどいやしなない。

受信専用機とはいえ、ほとんど魔道技術に頼らず、誰にでも使える『ポケットベル』は、同時代に開発された複合情報魔道演算機パーソナルコンピュータと相互接続型地脈通信システムと同様に、情報通信に革命的な変化をもたらしたのだ。

ジェニファは、通りを少し走って、街路樹に横付けされた木製の小部屋に入り、幹を叩いた。

音声をルーン文字に変化させ、信号として地脈を通し、更にそれを音声へと還元するための通信機が飛び出してくる。

硬貨を投入口に入れて、職場への番号を押す。

「はろはろ」。どうしたんです。室長？ 私、今、デート中なんですけど」

返事は聞こえなかった。

否、聞こえていたけど理解できなかった。

大事件だ。

それは、わかる。

でも、それ以上にジェニファ・ポプキンスの胸を満たしたのは、活火山のような憤怒の激情だった。

「今すぐ、……戻ります」

通信機を元に戻すのも忘れて、肩を震わせる。

奴が、この国に戻ってきた。

当たらない予言を残した男。

『ポケットベル』の、『複合情報魔道演算機パーソナルコンピュータ』の、相互接続型地

脈通信システムの原案を起こした男。

七年前、ジェニファの、仲間の、敬愛していた先輩とその家族の、すべての運命を狂わせた元凶が。

「捕まえてやるから。お前だけは絶対に。絶対にこの手で！」

その為に軍を辞めた。

その為に公安警察へと入った。

その為に西部連邦人民共和国とナラール・ナロールの組織犯罪を追う外事二課へと異動した。

すべては、この日の為に！

ジェニファ・ポプキンスは、扉を蹴りあけるようにして通信箱を飛び出した。

第三話 犬と猿は夢の中で踊る

第三話 犬と猿は夢の中で踊る

5

夕日が差し込む橙色の部室に、赤枝基一郎は足を踏み入れた。

日に焼けた畳の上で、すらりとした長身の女学生が一人、今度の舞台で使う暗幕を縫っていた。

俯いていた少女、かりや・このえ苅谷近衛は、来訪者に華の様な笑顔を向けて、……即座にふてくされた。

「なんだ。赤枝か」

「高城たけしろじゃなくて悪かったな。苅谷」

鞆をロッカーに入れて、赤枝は部室の隅にあるカーテンで作られた更衣ブースに入る。

粗大ゴミ置き場の放棄品を修理した扇風機が唸っているものの、夏の西日もあって、制服ではひどく暑い。

カッターシャツをアロハシャツに、指定ズボンを薄地の綿パンツに着替えて、ようやく人心地ついた。

「俺がいるのに着替えるな」

「いいだろ、別に」

これが後輩の美鳥や、紫崎先輩だったら遠慮もするだろう。

だが、苅谷近衛は赤枝基一郎にとって天敵であり、異性として意識したり、配慮する対象ではなかった。

「あいかわらずちゃらついた格好だな」

「お前こそ堅苦しい格好じゃないか」

近衛は背の中ほどまで届く長い髪を飾り気のないゴムで束ねて、下は青のドレスパンツを穿き、上に白のシャツを着て、サマージャ

ケットを羽織っていた。

ちなみにすべて男物である。

ここまで固めたらいつそ制服の方が涼しいのでは、と赤枝などには思うが、彼女曰く「スカートなんてひらひらしたものは着ていられない」だそう。

白椋高校の演劇部は、変人が集まっている。

誰もがなんらかの問題を抱えて、孤立を選んでしまっはすの者達だが、どういうわけか集まっていた。

それは、部長の高城悠生たかしろ・ゆうきが部員数の少なさから、積極的な勧誘を繰り返した結果かもしれないし。

勧誘された者達が、「演じる」ことに、なんらかの意味を見出したからかもしれない。

赤枝の妹、円まどかは、「類は友を呼ぶのよ、きつと」などと、実も蓋もない発言をしていたが。

「暑いな」

「ああ」

苅谷は暗幕の修繕を続け、赤枝は照明と音響機の手入れを始める。二人に交わす言葉はなく、ただ針と糸を、そして雑巾を動かした。扇風機が蒸し暑い部屋の空気を、重くかき回す。

もうすぐ選挙が始まる。

熱心な教育系労働組合の一員である赤枝の父と、医療系労働組合の一員である母は、危険団体として公安警察の監視対象である支持政党の選挙活動のために、日夜街頭車を乗り廻していた。

そして、過激な勧誘と政治色の強すぎる活動ゆえに、仏蘭西など一部国家からカルト（セクト）指定されている某宗教団体の婦人部で高い地位にある苅谷の母親も、担いだ政党のために汗を流していることだろう。

赤枝の両親も、苅谷の母も、世界のため、恵まれない人のため、すべてを投げ打ち、闘っているのだ。

たまに、阿呆かと思わないではない。

己が家族の面倒も放り出して、デモやら集会やらの政治運動に生活の全てを捧げることに、何の意味があるだろう。

赤枝は、友人の高城のように家族ぐるみで旅行に出かけた記憶もなければ、月一で家族と一緒に食事や買い物をする習慣もない。

苅谷だってそうだろう。彼女がわざと男装したり、まるで男のように振舞うのは、それを好むと言うよりも、自分をまったく省みない母親へのあてつけだろうと、赤枝は薄々理解していた。

みんなのために、みんなの幸せの為に。まるで催眠のように繰り返して、まるで自分が正義の味方のように振舞って。

なのに、どうして、自分が「味方」であるはずの一般人を区別するのか？

少し注意すればわかる。

みんなのためといいつつ、共産主義者は民衆を二つに分けている。自分と同じ革命の志を抱いた同志や同じ価値観を有する民衆を「市民」と呼び、権力者に騙される犬やらノンポリやらのレッテルを張った他の民衆を「大衆」と呼ぶ。

苅谷たち宗教団体に至っては、もっと明確だ。信者と、それ以外。一般大衆の呼び方こそ「庶民」とまとめて呼ぶことが多いようだが、よりにもよって団体の代表が他国の首相に面会した際、「政治家ではなく庶民の王と会ってくださりありがとう」等と言ってしまっている。

赤枝と苅谷。二人の両親が支持する政党は、天敵だった。

対立の歴史は古く、もはや解き崩せぬほどの宿業を背負っている。罵倒中傷ときに暴力。

もはや選挙とは関係のない水準で互いを傷つけ、打ち倒そうとする。

そんな親世代の因縁もあって、赤枝は苅谷を敵視していたし、苅

谷もまた赤枝を敵視していた。

今年の初夏、高城が苅谷を演劇部へと勧誘した際には、赤枝は演劇部を乗っ取られてはたまらないと断固として反対した。

同様に、苅谷もまた演劇部が「洗脳済み」ではないかと相当に警戒していたらしい。

結局、赤枝は高城の説得に押し切られ、苅谷は高城を信じた。

変人ぞろいの演劇部は新たな変人を迎え、今日も平常運転。

騒がしい日々は続き、赤枝と苅谷は理解した。

どうして互いがいけずかないのか。どうして互いを白眼視するのか。

多分、似ているからだろう。

赤枝は、表向き綺麗なものを求めながら汚い手で理想を踏みにしる、共産主義の欺瞞を知つてなお、捨てられなかった。

苅谷は、宗教団体の活動や教義を嫌悪しながら、母親の存在ゆえに完全に否定することができなかった。

赤枝が苅谷を見る時、苅谷が赤枝を見る時、中途半端な自分を相手の中に見てしまう。

だから、二人は天敵。己が存在を許せないために、相手を許すこともできない。

それにしても、今日の部室は酷く暑かった。

赤枝がハンカチで幾度拭いても、額に汗がにじみ出てくる。

眼鏡を外し耳元を拭いて、部室の隅に目を向けると、クーラーボツクスが目に入った。

高城が紫崎先輩が、朝のうちに保冷材を補充してくれているだろう。

そうあたりをつけて、開く。

柔らかくなつた保冷剤と、少し温くなつたペットボトル入りの緑

茶が二本、入っていた。

「飲むか？」

「お前のじゃないだろう？」

「あとで買っておくさ」

苅谷は目を伏せて、やがて、頷いた。

赤枝がペットボトルを投げ、苅谷は受け取る。

まるでタイミングを合わせるように、二人はキャップを開けて口をつけた。

赤枝は音を立てて喉に流し込み、苅谷は静かに喉を湿らし続ける。妙に礼儀正しいヤツだと、赤枝は思う。

「お前と、茶を飲む日が来るとは思わなかった」

苅谷が神妙に呟いた。

「別に、嫌っていたわけじゃない」

赤枝は応える。嘘ではないと思う。危険視はしていたが。

「俺はこの部活が好きだよ」

「……」

苅谷の言葉に、赤枝はどう返事をしたものか、悩んだ。

「それだけは、わかってくれ」

「ああ。覚えておく」

信じられると思う。信じたいと思う。

けれど、苅谷自身を信じられても、彼女の周囲まではわからない。苅谷が高城に好意を抱いていることは知っていた。

友人としての信頼か、異性としての思慕かはわからない。

彼女自身、きっとまだどちらか、理解していないだろうから。

もしも友人でなく、恋人になりたいと願ったら、彼女の周囲が高城を「囲い込み」に入る可能性は高い。

勧誘は高城の家族親類に及び、結婚し子供を授かれば、その子も自動的に「入信」させられることになる。

赤枝は、高城が家族を大事にする男だと知っていた。

彼が自らの意思で入信するなら諦めもつく。

だが、無理やりの圧力で入信などさせようものなら、高城が大事にしているものが失われるだろう。

友人として、不幸を見過ごすわけにはいかない。

赤枝は、全力で阻止に回る。

たとえエゴであっても、赤枝にとっては、高城悠生と円を守ることだからだ。

赤枝はペットボトルの中身を飲み干した。

ダンボールで作った、分別済みのダストボックスへ投げ入れて、立ち上がる。

「補給に購買へ行ってくる」

「いや、俺が行く」

「その格好じゃ、部室棟から出れないぞ？」

それとも、俺の前で着替えるか、近衛ちゃん？」

つい、からかったのがマズかった。

正座からとは思えない流れるような動きで、苅谷は間合いをつめて、ポンと手品のように赤枝は投げられていた。

「気絶させれば、問題ないだろう？」

「このオトコンナ……」

苅谷は幼い頃から、祖父の居合いだか合気道だかの道場でしごかれていて、素人に毛が生えた赤枝よりは数段腕が立つ。

多分、ともに闘っても、絶対に叶わない。

が、それでは、赤枝のなけなしのプライドが許せない。

「いいぜ。表へ出る」

「仕方がない。遊んでやろう」

挑発に乗っている時点で、十二分にこっばずかしいのだが、気づいてはいけない。

二人並んで部室のドアを開け放って。

「何してんの、二人とも？」

安さで有名なソーダアイスと、茶や清涼飲料水のペットボトル入りの袋を提げた高城達、残りの部活メンバーと鉢合わせた。

まさかつまらない理由で決闘だとか、殴り合って友情を深めようとしていましたなどは、恥ずかしすぎて口が裂けても言えず。

「ちよっとトイレに」

「手を洗いに」

計ったように一致したタイミングで咳払いして、二人はかくかくと反対の方向に歩き出した。

「相変わらず仲いいなあ」

「「よくないっ!」「」

否定のツツコミまで、見事にハモっていましたとさ。

そうして、赤枝基一郎は夢から目覚めた。

「元の世界を夢見たのはいいが、なんであいつのことなんだ」

もつとこう、『セピア色の思い出!』みたいなものなら良かったのに。

……どんな思い出をそう言うのかは知らないが。

沁みのついた天井を、霞む目で見つめて息を吸い、赤枝は布団を跳ね上げる。

枕元に用意した眼鏡をかけて、共同の洗面台へと向かう。

赤枝がこの世界に来て、およそ3ヶ月近くが経っていた。

日本より涼しい夏は終わり、2階廊下から見える街は秋の紅葉で覆われている。

濛々とした髭面の恰幅のいい中年の男が、アパート下の公園で柔軟体操をしていたが、赤枝を見つけて手を振った。

「おはよう、アカーシ。」

今日の仕事は1時間後だ。今日も頑張ろうぜ」

「おはよう、Mr.ブルース。世話になる」

ブルース・ハックマンは、この古ぼけたアパートに住む日雇い労働者達のリーダーだ。

追いはぎの一団と殴りあった胆力を認められ、赤枝はブルースによつて、アパートに迎え入れられた。

彼らはどこの馬の骨ともわからぬ異国人の赤枝に、気前よく仕事を斡旋してくれたり、言葉と文字を教えてくれた。

特にブルースは、食事を分けてくれたり、小学校で使っている国語の教科書やドリルをプレゼントしてくれたり、まるで我が子のように可愛がつてくれた。

なんとか言葉がわかるようになった頃、安ビールを飲みながら教えてくれた。

赤枝は、故郷に残してきた子供に似ているのだという。

およそ10年前、この国、ガートランド王国は、外需から内需への市場転換に失敗し、破滅的な大不況に見舞われたという。

株や土地の異常な高騰、政策の失敗、外資外国の圧力、政府の失策、銀行の失敗、他にも様々な要因が絡んだようだが、辛うじて日常会話をこなせるようになったばかりの赤枝には詳細はわからない。ともかく王国の経済は、泡が弾けるように吹き飛んだ。

運悪く大地震やら、カルト教団の魔導テロやら、モンスターの大规模襲撃やらが重なって、一時期は亡国の危機に瀕していたらしい。郊外の馬車組み立て工場で働いていたブルースは、突如遺跡からあふれ出たモンスターから仲間を庇い、左腕が思うように動かなくなっただけらしい。

企業は深い同情を示しつつも退職を勧告し、ブルースは受け入れた。

無情さにブルースは荒れた。

些細な事で妻を罵り、子を殴りつけ、家具を壊した。

現実を拒絶して酒に溺れ、賭博に逃避し、あげくに消費者金融に

金を借りるといふ愚行を犯した。

「アカーシ。オレは、弱かったんだよ」

「いいや、ブルース。あんたは強いよ。俺の知っている、誰よりも強い」

全てが台無しになる寸前に、ブルースは良心を取り戻した。

妻と子供を離縁し、家と土地と車を売り、借金を清算した。

このアパートも不法占拠ではなくて、ちゃんと借りているものだ。勤め先の企業を退職したブルースの知人が、かなりの格安で提供してくれたらしい。

知人に感謝したブルースは似たような境遇の仲間達を集めて、小さな日雇い労働の組合を作った。

今も、奥さんと子供に、少ない稼ぎから仕送りをしていることを、赤枝は知っていた。

大不況の傷跡は、今でも残っている。

いくらかの企業は、熟練工をリストラし、安価な外国人労働者を招き入れた。

が、ろくな教育も施さず、首切りと新規雇用を繰り返したため、件の追いはぎのような集団を形成したり、中にはいたいけな幼女を強姦、絞殺するという暴挙に出るものまで現れた。

外国人労働者の流入もあって、労働市場は低価格を極め、壮年以上に再就職の機会はなく、未来を憂い命を絶つ若者もあとを絶たないという。

つまりは、このガートランド王国も、赤枝の故国と同じで山盛りの問題を抱えていた。

異世界というものがあるとして、そこが理想郷だと誰が決めた？

人間がいる限り、問題は起こり続ける。

完全なるユートピアなんて、マルクス達が夢見た妄想の中にしか存在しない。

「理想郷、か」

齒を磨き終わって、赤枝は思う。

理由があるはずなのだ。

この世界に招かれた理由が。

あのとき、「元ある世界から逃げ出したかった」者がいるとするならば、それはきっと赤枝と苅谷だろう。

仲間達の手がかりは、まったく掴めない。

新聞にも、タブロイド紙にも、異世界人の出現なんて書かれてはいない。

——嫌な事を思い出した。

この木材と大型人形が中心を占める世界で、酷く似つかわしくないものがある。

ブルースが持つ、小さな板状の端末。

あれは、赤枝がいた世界のポケットベルそのものだ。

世界を跳ぶというのなら、それは”空間だけとは限らない。
”
あるいは、”時間をも越えるのではないか？”

携帯電話の小型化に、元の世界は20年以上を費やした。

だが、ポケットベルは、およそ5年で発展を極めた。

電波技術が高いとは思えないこの世界で再現するならば、携帯電話よりポケットベルの方が楽だろう。

それは、最悪の想像だ。

もしも赤枝の推測が正しいければ、演劇部七人は、バラバラの時間軸に飛ばされたことになる。

「……気の迷いだ」

赤枝は眼鏡を拭いて、掛け直した。

待っていても、仲間は見つからない。

名残は惜しいが、そう長くないうちに、このアパートを出る事になるだろう。

ブルースの周りでは、他の仲間達も柔軟を始めていた。

「親父、か」

赤枝は思案する。

自分は、ブルースに、政治活動にあけくれる実の父が見せてくれなかった、父親の背中を見ていたのではないかと。

旅立ちの時は近い。

そして、その日は前触れもなく訪れた。

6

王国暦1110年、紅森の月10日目。

この日、ガートランド王国警察庁外事課とニューカルナフィア州警察は、狂騒状態にあった。

大不況から続く10年、王国の治安は悪化し続けていた。

その悪化に拍車をかけたのが、隣国ナロール国からの犯罪者の流入である。

10年前、ナロール国で強盗団に対する石弓の発砲を許可する法律が成立し、銃殺を怖れた強盗団の多くが王国へと流れ込んだ。

彼らは、短期ビザを使って王国へと侵入し、携帯用のガススプレーや包丁などを使って、王国民から金品と時に命まで奪い取った。放送媒体や新聞では、「武装スリ団による被害」などと報じられ

だが、そんな水準の問題ではない。

れっきとした「武装強盗殺人団」だ。

対する王国警察は、威嚇以外の石弓の発射を禁じられ、どうしても後手後手に回る。

流入した武装強盗団は次第に組織化され、国宝規模の文化財までが管理人を殴り倒して強奪された。

それらは闇商人を通じてナロール国へと運び込まれ、博物館などに飾られている。

王国の抗議など馬耳東風で、このような抗議は王国ナロール国間の友好に水を差すと逆に非難される有様だ。

外国人犯罪者の王国内の犯行は右肩上がりで増え続け、とどまるところを知らなかった。

海上保安警察の行動拡充や入国審査の厳重化、銀行振り込みの制限など、現行法を駆使した対策が採られるのは、タカ派と呼ばれた首相が立つ二年後を待たねばならず、この時点では親ナロール議員とその勢力は圧倒的だったのだ。

だが、この日ばかりは、枕を濡らして泣き寝入りするわけにはいかなかった。

「検問を敷け！ 一車両も海岸へ向かわせるな！」

「駄目です。突破されています。ホシは、なんらかの魔道兵器を携えている模様」

「契約神器か！」

午後十三時、ニューカルナフィア州の遺跡から発掘された、新しい契約神器を護送中の輸送車がナロール系の強盗団に奪取された。

「こんな真似をしてっ。外交問題に発展するぞ！」

「無理でしょうね。犯罪者のやることに感知せず、我が国はいつものように遺憾の意を表明して終わりですよ」

いつもの温和さをかなぐり捨てて激昂する警部を、若手のキャリア警視が冷たく突き放す。

「だからと言って、見過ごすわけには行きませんが。彼らの後ろに

は、きっとナラール国がいる」

ナラール国。

幾人もの王国民を拉致して殺害した、王国の事実上の敵性国家。だが、政治献金や配下団体の武力を中心とした彼の国の魔手は、王国議会の野党を中心に一部は与党にまで入り込んでいた。

こと懐柔と傀儡化においては、ナラール国の手腕はいつそ見事と
いつていいだろう。

ナラール国とナロール国は、もとはひとつの国ながら、長らく敵
対関係にあった。

少なくとも、そう見せかけていた。

だが、ナロール国の先代大統領が融和策を進めると、瞬く間にナ
ラール国に取り込まれてしまった。

本来なら敵対していたはずの、在王国ナラール人組織と、在王国
ナロール人組織も同じだ。

在王国ナロール人組織のトップは、いつの間にやら在王国ナラ
ール人組織の関係者に挿げ替えられ、祖国に先駆けての統一、融和と
大いにはしゃいでいる。

「奪われたのは、第五位契約神器『人型陸上戦術兵器』」。

これを見過ごせば、七年前のテロを上回る被害が出ます」

「機動隊を投入する。異議はないな」

「ありません」

ニューカルナフィア州北東海岸を封鎖すべく、州警察は人員のほ
とんどを投入し、……だが、阻む事はできなかった。

彼女は、ながい間、旅をしてきた。
そして、今も。

とおい昔に、約束したから。
託された願いがあつたから。

器は壊れて、こわれていた飯の器を借りて。
ながいながい時間をかけて修復した。

『何があるうとも、あいつらの意思を優先しろ。』

我はもう、あいつらを守れない。だから、お前が守るんだ。
私のいとしい娘……』

『姉さんをお願い。いままで、ありがとう』

『ユミル。君は僕の誇りだった。あのひとを頼んだよ』

ああ、そうだ。

あれはもう、契約ではない。
家族との、大切なひとたちとの約束だ。

どれほど時間が経っても変わらない。

千年の時の果て、再び訪れるだろう黄昏の刻に、母様ともう一度、
あいまみえなければならぬ。

伝えなければならぬ。

もう戦う必要はないのだと。

母様の家族は、さいごまで母様を案じていたと。

でも、それは難しい事。

だってそんな契約をのんでくれそうな人なんて。

「
見つけた」

.....

.....

荷物運びの仕事を終えて、帰る途中、街はサイレンが鳴り響いていた。

不安に思いながら、くたびれた足をアパートへと進める。

「Mr・ブルース。何か言ったか？」

「おいおい、幻聴か、アカーシ？」

疲れているんだな。今日の飯は奮発しようか？」

「ち、ちがう。そんなんじゃない」

秋の日は、もう随分と下がっていた。

もうすぐ、黄昏。

昼と夜の狭間で、赤枝基一郎は己が運命の選択を迫られる。

第四話 若人は狭間にて選択する

7

子供の時、積み木遊びをしたことはあるだろうか？
土や、砂でお城を作ったり、石を重ねるのも楽しいものだ。

あるいは、一生懸命作ったお城を壊すことに、背徳的な喜びを見出す者もいるかもしれない。

価値を知っているものだからこそ、大切であることを知っているからこそ、壊したい。

ここまでではいい。子供の純粹さは、時に嗜虐心や加害心への純粹さにも通じるから。

だが破壊への渴望は、稀に狂気という炎を宿し、留まる事を知らず燃え広がる。

自分ではない誰か、その誰かが大切にしているものだからこそ、奪いたい、破壊したい。

遊び半分で蟻の巣を潰す。虫の四肢をもぎとる。猫を、小動物を、そして、人間を……殺める。

流れる血は美しいだろう。かけがえのない命だからこそ、輝きを摘み取り、己が手で汚泥に落とす。

それは、なんという快楽か！

どうということはない。ガートランド警察の検問を突破し、町を破壊しながら海岸を目指す彼らは、とつく壊れていた。

王国に一泡吹かせる偉大なる作戦。その気付けにと打った薬物で、彼らの理性は消し飛んだ。

替わりに膨れ上がったのは、まるで神に成り代わったかのような万能感と、裏腹な、鼠の如き劣等感だった。

自分達は一万年前から続く偉大な文化の創造者であり、礼と徳をもって敬われた至高の民族の末裔だ。

古来より王国を繁栄させる様々な文化を与え、王国の政財界を牽引し導いてきた。

だというのに、何だ？

王国民は、自分達への感謝を忘れ、傲慢に振舞っている。

彼らが謳歌する栄光は、すべて、我らが与えてやったものののに、
購わねばならない。

頭を垂れ、靴を舐めて、土地と女と財宝のすべてを差し出して、
許しを請わなければならない。

それこそが友好、それこそが隣人愛、それこそが王国の取るべき
ただひとつの道だ。

購わねばならない。

これまでの人生でこれっぽちも苦しみを味わったことがない糞
どもに、我らの強さと偉大さを見せ付けなければならない。

購わねばならない。

我らの味わった屈辱を、王国民の血と命で購うのだ。

そのときこそ、彼らは身の程を知るだろう。

恐怖に怯え、許しを請うだろう。

さあ、殺せ、潰せ、破壊しろ。

今こそ圧倒的な力で、蹂躪するのだ。

偉大なるナロールに栄光あれ！

狂気である。

論理的に破綻しているし、矛盾していた。

ナロールには、王国に影響を与えるような文化はなかったし、事
実、文化的に価値あるとされる遺物が一つも残っていなかった。

ナロールに、王国の政財界を牽引し導くほどの才覚があったなら、
いつの時代も困窮し、王国に援助を求めることもなかっただろう。

王国に奪われただの、共和国に奪われただのといった言い訳に意味はない。

ナロールは、自身が与えたと主張する文化を、全く維持することができなかった。

それも当然だ。

大陸史において、ナラール・ナロール地方は、西部連邦共和国とガートランド王国を結び、ストローに過ぎなかった。

文化的交流の中継点ならば、まだ救いがあっただろう。

異文化の中継を担った地方は、多くの場合、融合、発展させ、独自の文化を生み出すものだから。

だが、ナラール・ナロール地方は、神焉戦争後千年の長きに渡り、西部連邦共和国の属国として、何一つ他国に誇りうる独自の文化を育むことができなかった。

あるいは、育もうとしなかったのかもしれないが。

属国として困窮するナラール・ナロールは、恥辱に満ちた「史書や遺物に裏付けられた歴史」ではなく、妄想としての「あるべき歴史」を必要とした。

だがどれほど精緻に妄想を形作ろうと、それは、現実によって覆される。

その落差は、新たな恥辱として、ナラール・ナロールを焼いた。

やがて、彼らはひとつの価値観を作り上げた。

『恨の精神』——怨み、嫉妬、不快感、他者から己が感じたあらゆる負の感情を恨みと呼び、それを晴らすことを善とする倫理観を確立させた。

水に流したり、昇華するのではない。『己が恨みを抱いた相手を手段を選ばず不幸にすること』を、『道徳的に善なる行為』と位置づけたのだ。

屈辱や嫉妬の内因を自身に求めるのではなく、常に他者に転嫁する思考法は、結果的に個人の成長を阻害し、円滑な社会交流をも阻害する。

マイナス面を指摘されて、それを恨みに思おうと、自身を改善しないかぎり、欠点は欠点として残り続ける。

なにより、一方的な主観から『恨』を抱かれ、『不幸になれ』と付け狙われる対象には、たまったものではないだろう。

この価値観は、ナラール・ナロールを蝕み、両地方に関わった多くの国や個人を不幸に導いた。

そして、それは、異世界に招かれた赤枝基一郎とて、例外ではなかった。

8

この異世界が平穏だと、どうして信じられたのだろう。

赤枝基一郎は、ブルースとともに、夕焼け空の下、ひびの入った石畳の廊下を走りながら歯噛みした。

響く轟音、湧き上がる悲鳴と、逃げる群衆。

非常事態と避難勧告を告げる鐘の音が響き渡る町を、複数の巨大な人形が蹂躪していた。

「なぜだ。なぜこんなことを……」

わけがわからない。理解できない。

自分達は、普通に暮らしていただけなのに。

どうしてこんな目にあわなければならない？

深緑色に塗装された、全長10mを越える金属製の巨人が、全部で七体。

明らかに戦闘目的で作られた、無骨で巨大な西洋甲冑が、地面を踏みしめるたび、石畳の道路は砕け、彼らが塗装と同じ色の棍棒を振るたびに、木造の家々が悲鳴をあげて倒壊した。

王国警察が馬車を集めてバリケードをひいても、阻止することなどではしない。

蹴り潰され、殴り壊され、悲鳴と絶叫が増えるだけ。

警棒や石弓程度の火力で、あの怪物どもを止められるわけがない。軍隊は何をやっているのか。これでは、まるで性質の悪い怪獣映画だ。

「怪物め……」

「違うぞ。アカーシ。あれは、人間だ……」

無意識の呟きに、先を走るブルースが、どういっつもりで応えたのかは、赤枝にはわからない。

かつて、遺跡から迷い出た本物のモンスターと闘い怪我を負ったブルース。

本物の怪物は、これ以上に恐ろしいものなのだろうか。

違う、と、赤枝は直感した。

『怪獣は、怪物は、人を殺さない』のだ。

ただ己の心のままに暴れるだけだ。

人間が、人間こそが、悪意から銃をもち、その引き金を引ける。

化学ガスを噴霧し、ビルに旅客機をつっこませ、弾道弾を発射できる。

たとえば。

日本では、殺戮衝動に突き動かされた男が、包丁を片手に学校を襲ったし。

米国では、妄執に囚われた韓国人留学生が、ヴァージニア大学で銃を乱射して三十余名を殺害した。

韓国では、祖先に親日派のレッテルを貼られた途端、隣人に墓を掘り返され、子孫は財産収奪の上民衆に暴行を受ける。

中国では、共産党政府によって、東トルキスタンや内蒙古等の少数民族民族が、民族浄化のために堕胎や不妊手術を強いる拉致拷問を受けて。

露西亜では、軍隊がチエチエン人の四人に一人を殺害する地獄絵図が日常だった。

戦争が起こらなくとも、暴力やテロルの種は、どこにだって潜んでいる。

原因は個人の異常か。国家の異常か。あまりに多くて果てがない。だが、平和も、平穏も、安全と生命を守ろうとする意思が無ければ、容易に崩れる。

武器も軍隊も所有しない国を攻める国がどこにありますか？

この問いかけに対する返答は簡単だ。

全部。

有史以来、野心をもった国で、弱兵の国を侵攻しなかった国はない。

逆にこう聞き返すべきだ。

武器も軍隊も所有しない国で、攻め滅ぼされなかった国はどこにありますか？ と。

表向き非武装を謳う”平和の国”コスタリカは重火器で武装した自国警察と米軍が常駐し、長く中立を守ったスイスは女性すら銃を習う国民皆兵。

米軍を追い払ったフィリピンは中国の侵攻を招き、武力のなかったチベットに至っては殲滅された。

つまるところ、脅威に対し、止める力が無ければ、災厄は引き起こされる。

アルカイダによる9・11同時多発テロ。オウム真理教による地下鉄サリン事件。

『災厄は起こりえない』という前提こそが、間違っている。だから、それはこの異世界でも同じこと。

ガートランド王国は、人災に対する備えが準備されていなかった。

「アカーシ、あと少しだ。頑張れっ」

「ああっ」

あがりそうに顎を力づくで落として、何度も息を吸って吐く。足はガタガタで、足首はまるで熟れた木の実のように腫れている。まるで血を吸ったように赤い空の下、路地裏を踏み分けて、赤枝たちは、ひとつの建物を目指していた。

自治会館。

その裏庭に、作業用の馬車がひとつ置かれていた。地域住民の避難を誘導し、ブルースと赤枝は最後までこの地に残った。

警察の用意した大型人形駆動の輸送車に、避難民と共に乗り込んだ自治会長が託したのが、その車庫の鍵だ。

ブルースが蹴りあけるような勢いで門を乗り越え、門を外す。

赤枝は門を開いて裏庭の車庫を開き、ブルースが馬を連れてくる。準備は整った。

脱出するのは、彼らが最後だ。

多くの物を失い、被害は出るだろうが、それでも人命の損失は最低限に抑えられた。

「ハイヨオオオ！」

ブルースは御者席に、赤枝は客席に乗り込み、自治会館から走り出す。

脇道を出て、大通りへ。

あとは、真っ直ぐ進むだけで――。

「!!」

その時、その光景を見なければ、あるいは二人の運命は変わって
いたかもしれない。

だが、ブルース・ハックマンは見てしまった。

車椅子に乗せた婦人を押す少女が、深緑色の巨人に追われ、逃げ
惑うのを。

二つ先の交差点だ。馬車でなら、どうにか追いつかれずに逃げの
びられるかも知れない。

見捨てることもできた。見ないふりをすることもできた。

巨人は明らかに悪意をもって、奇妙な踊りを踊りながら、凶器の
脚を踏み鳴らし、親娘らしい二人を蹴っていた。

ブルースには、脅威に襲われる二人の姿が、離縁した妻と子に重
なって見えた。

「アカーシ、すまん」

「何謝ってるんだ？ ブルース。つきあうさ」

無人の通りをUターンし、ブルースの駆る一頭立ての馬車は、巨
大な悪魔へと向かってゆく。

「イヒヒヒヒ。イーッヒッヒ」

人形の音声素子から、操縦者らしい男の笑い声が響いている。

覚せい剤でもやってるんじゃないかと疑うほど、正気から外れた
高揚した声だ。

「こっちだ！ 来い！」

赤枝は、扉を開いて車椅子を押す少女を呼ぶ。

少女は、まるで血の池で天へと伸びる糸を見つけたように、陽の
差した顔で微笑み、母親らしい女性を抱きあげた。

馬車が走る。

「ヒッ、ヒャッハアアア」

巨大な西洋甲冑は、狂った笑い声をあげながら、まるで虫でも払うように深緑の棍棒を振り下ろす。

しかし、その一撃は幸運にも外れる。

石畳を穿つ轟音を聞きながら、赤枝は少女から女性を受け取り、胸に抱くような形で少女を馬車へと救出した。

交差点の近くだったのが幸いした。

Ｕターンの必要も無く、脱出路へと逃げ延びる。

「助かりました……」

「ありがとうございます」

どうやら、二人は本当に親娘らしかった。年齢は30の半ばと、中学生くらいだろうか。

母親の方は長く、娘は短かめだったが、どちらも栗色の髪で、瞳は海のような澄んだ青。

街の方の住人なのか、上着は騒動のせいで土埃に汚れていたが、ここらでは見かけぬ質の良いものに見えた。

「いいさ。助かって良かった……うわっ」

馬車が唐突に左折して、赤枝は少女と婦人に抱かれるように、座席に押し倒される。

「ブルース。もう少し、丁寧にできないのか。俺だけじゃないんだぞ！」

香水と甘い匂いに、赤枝の頬が朱に染まる。

彼は、苦手なのだ。女性というものが。

「わかつちやいるが、非常事態だ。もう一体、来やがったっ」

「っ」

客席の三人は息を呑んだ。

もう一体の金属の巨人と、巨人が乗る馬型の巨大人形が引く輸送車が、進路の先に見えていた。

「挟み撃ちかよ？」

「……」

「そんな……」

ブルースは、少しでも二体の人形から距離を取ろうと馬車を駆った。

だが、巨人もまた動くのだ。

馬型の人形に乗った巨人はともかく、狂気じみた笑いをあげる巨人の方は明確に、馬車を追ってきた。

「イーッヒッヒ。掃除だ。掃除だ。ソウジソウジソウジイイイイイ」

あいも変わらず、ビッコを引くような、奇妙な踊りを踊りながら、少しずつ距離を詰めてくる。

「イヒヒヒ。オカシイだろう。」

オカシイじゃないか？

障害者なんて生きる価値のないゴミなのに。

なんでお前らに選挙権があつて、俺らにはないんだ。

掃除。そうジ。ソウジ。ごみはソウジシナキアアアア」

「っ」

揺れる車内で、赤枝の血が沸騰する。

沈痛な顔で娘を抱く母親。唇を閉じて、手を震わせる娘。

きつとあのろくでなしは、赤枝たちが助けに行くまで、口の腐るような罵詈雑言を二人に浴びせていたのだろう。

赤枝はようやく得心した。

びっこをひく踊り。あれは、”病身舞”だ。

人の尊厳を踏みにじる、そんな不道德極まりない伝統芸能が、赤枝たちの世界にもあった。

「あの野郎！」

もしも拳が届くなら、殴りつけてやりたかった。

だが、赤枝の拳は届かない。非力な自分達は、ただ追われるだけ。ブルースが懸命に馬を走らせる。距離が僅かに開く。

「ソウジイイイイイ」

その時、深緑の巨人が行った蛮行を、赤枝は信じられなかった。

巨人は、棍棒を置くと、背に負った箱らしきものから、大きな石

弓を取り出し。

射た。

衝撃が、赤枝たちを襲った。

動く標的を射る等、簡単なことではない。

鉄柱は、馬車を外れて、しかし、着弾の爆発で飛び散った石畳のかけらが、運悪く馬車の車輪を直撃した。

転倒する。

車ではなく馬車だった事、ギリギリでブルースが速度を緩めたことが幸いしたが、それでも屋根へと叩きつけられる痛みは強烈なものだった。

それでも、車内の赤枝たちは、マシだったのだ。

ブルースは放り出され、直後に振り飛ばされた御者席の下敷きになった。

「ブルース……」

「ついて、ねえな」

全身打撲と下半身に裂傷。

ゆっくりと血のにじむ石畳で、髭もじゃのブルースは、痛みをこらえて気丈に笑って見せた。

娘が、ブルースを下敷きにした御者席にかけより、持ち上げようとしている。

「おい、アカーシ」

「わかってる」

赤枝は、倒れている婦人を抱き上げ、幸いにも傷を負わなかった馬へと乗せた。

「いけません……。元はと言えば、私達が」

「いいんだよ。あんた達のせいじゃない」

そうだ。この人たちは悪くなんて無い。

悪いのは、深緑の巨人に乗った腐れ外道と、……その外道を止められない自分達の非力さだ。

赤枝は、服が裂け、手から血が滲むのも構わず、御者席を動かそうとする娘の手を引いた。

「待つて。待つてください。一緒に持ち上げてっ」

「お嬢ちゃん。気持ちは嬉しいが、俺一人の方が楽なんだ」

「そんな、そんなことはないです」

「頼みがあるんだ。助けを呼んで来てほしい」

「助け、を」

少女の瞳が開かれる。

震える身体を持ち上げて、赤枝は、娘を母親と同じように馬へと跨らせた。

喉を鳴らす馬の鬣を撫でさする。

「いい子だ。頼んだぞ」

赤枝は、馬車と馬を結ぶ綱を解いた。

巨人が来る。次の一撃は、石弓か、棍棒か、……直接踏み潰すのか。

その前に逃がさなければならない。

「行くんだ」

「お名前を、せめてお名前を教えてください。」

私は、プリシラ。プリシラ・エリン。母は、セシリア・エリン。

お兄さんとおじさまは？」

「俺は赤枝基一郎。彼は、ブルース・ハックマン。覚えていてくれ」

「アカエダ？ わ。忘れません。必ず、必ず助けを呼んでくれますからっ」

「頼んだぞ」

赤枝は、馬を押した。走り出す。何度も何度も振り返る親娘を乗せて。

救援は間に合わない。間に合うはずが無い。

あの親娘が、鞍もない馬から転げずに、この惨劇地帯から逃れられるかどうかさえ危うかった。

だとしても、意味はある。ブルースが、命を賭けた意味が。

「オレは、一緒に逃げろと言いたかったんだけどな」

「生憎、乗馬なんてハイソサエティな真似は出来無くてね」

「馬鹿野郎」

赤枝は、馬車の残骸から手ごろな木片を拾って、梃子の原理で、御者席をもちあげようとする。

力を込めると、木片は半ばからボキリと、折れた。

「ぐっ」

「悪い。今助け出すから」

鉄が必要だ。ジャツキまでは求めない。せめて梃子ひとつあれば、御者席を持ち上げられる。

木材等の非金属であらゆる製品を賄う、この世界の技術水準には舌を巻くが、こういうときは腹立たしい。

強度が絶対的に足りないのだ。

「いいんだ。アカーシ。逃げるんだ。こんなことに、つき合わせて悪かった」

呻くブルースの顔色から、血の気が引いている。

危険だ。早く病院に連れて行かなければならない。

御者席を、なんとかずらそうと、赤枝は両手に力を込める。

動かない。壊れた御者席は、手に血が滲むほどの力を込めても、寸分も動かない。

「アカーシも行くんだ。

生き延びたら、伝えてくれないか？

妻と息子に愛していたと」

「ふざけるよ」

「オレは、もう駄目だ。お前だけでも」

「ふざけろって言っただよ！」

赤枝の走り回った足にも、腕にも、力が入らない。怒りが、激情だけが、赤枝の崩れ行く身体を支えている。

「何かっこうつけてんだよ。」

生きるよ。ブルース。生きて、自分で会いに行け。

愛してるんだろっがっ！」

赤枝は思う。演劇部に入る前の、高城たちに出会う前の自分なら、逃げ出しただろうと。

褪めた視線でカッコをつけ、上っ面だけ綺麗な言葉を投げて、自分ひとりだけを大事にするのが格好いいと、そう思っていたから。だが違う。それは違う。守りたいものがあるのなら、たとえ泥にまみれても足掻かなきゃいけない。

それを向こうの世界で教えてくれたのが高城で、この世界ではブルースだ。

「今度は俺が、あんたの力になる番だ」

御者席は動かない。

「イヒッ。イヒッ。ヒヒヤハハハハ」

巨人が近づいてくる。

赤枝は、動け、動けと、ただ力をこめ続けた。

「アカーシ、もういい。死ぬつもりかっ……」

「死なない。死ねない。死んでたまるかああ」

高城悠生に、苅谷近衛に、高城円に、紫崎先輩に、後輩の美鳥や蔵人に、もう一度会うのだ。

彼らと共に、元の世界に戻るまでは、命を落すわけにはいかない。

『そう、貴方には、死ねない理由があるのですね』

「ブルース？」

何かの振動が、石畳越しに伝わってくる。

先ほど鉢合わせになった、巨人が乗る大型人形駆動輸送車が、まるで弾丸のような速度で赤枝たちへと直進していた。

狂った笑いをあげる巨人は、掃除掃除と喚きながら、ビルほどもある棍棒を振り上げた。

避けられない。轢かれるのが先か、棍棒で潰されるのが先か。

「ちくしょうっ」

赤枝たちに到達したのは、大型人形駆動輸送車の方が先だった。

馬型の人形が引く高速で走る越重の質量が、赤枝たちをギリギリ避けて、殴り潰そうとした巨人に突っ込んだ。

まるで、喜劇のように、撥ねられた巨人が道路を吹き飛ばされる。輸送車を牽引する人形にのった巨人も無事ではない。頭部がもげて、首のない屍じみた姿をさらしている。

それだけではない。

遠方から見たときには閉じられていたはずの、後方のコンテナ部が開いていた。

中に仕舞われていたのは、白い大きな人形だ。

金属で作られながら、まるで木造彫刻を思わせる、全体的に丸みを帯びたシルエット。

まるで雪のように、全身を純白に塗装された人形が、コンテナから身乗り出して、深緑の巨人の頭部を手刀で貫いていた。

『死ねない理由があるのなら、私が力をお貸ししましょう』

白い人形がコンテナを出て、赤枝の前に膝をつく。

頭部にある二つの赤い視覚素子が、真っ直ぐな視線で見つめていた。

「俺に言っているのか。力を貸してくれるって……」

『はい。私は、貴方が立ちふさがる障害を乗り越え、貴方に降りかかる厄災を払う、一助となりましょう。……ですが、これは、契約です』

「契約？」

『そう、契約です。私が貴方に仕える代わり、貴方は私の望みを一つ叶えてください』

「望みとは、何だ？」

『我が母を。黒衣の魔女^{テラー}を止める事』

……何を電波がかったことを言っているのか、と赤枝は困惑した。黒衣の魔女とは、この世界の神話における最大の邪悪だ。千年前、魔物の軍勢を率いて、九つあった大陸の八つを沈め、世界を滅ぼす直前に神剣を授かった勇者に討たれた魔王。

オカルトに詳しい紫崎先輩が言っていた、最終戦争における666を刻印された竜とか、サタンとかルシファーとか、そういう存在に近いだろう。

己を、魔女の子と名乗るのも異常なら、それを止めるなんて契約条件も馬鹿げている。

無茶を言っな。

「本気で言ってるのか？」

『はい』

「ただの高校生の俺に？」

『はい』

「それって、戦えって意味だよな」

『場合によっては』

赤枝は、御者席の下敷きになったブルースの血の気の引いた顔を

見た。

遠くの方で、起きあがろうとする深緑の人形を見た。

そして、海に沈もうとする太陽と、藍色に染まりゆく空を見上げた。

ここが選択だと、赤枝は理解した。

きつと白い人形と戦うことを選べば、当たり前、昼の世界には戻れなくなる。

黒衣の魔女の話が嘘だろうと本当だろうと、関わってしまえば、闘争と謀略渦巻く夜の世界に巻き込まれる。

決断は、簡単なことではない。

だが、黄昏の時間は短く、いつまでも立ち止まる時間は与えられない。

赤枝は、眼鏡を外し、内ポケットに忍ばせた不織布で、汚れを拭き取った。

眼鏡を、かけ直す。

「わかった。契約を結ぼう」

力が、必要だ。

今、ブルースを病院に届けるための。

深緑の巨大人形と渡り合うための。

演劇部の仲間達を探し出すための。

たとえその先に待つのが夜の世界だとしても、もう一度皆で過ごせる朝を再び迎えるために、あえて闇へと身を投じよう。

「俺の名前は赤枝基一郎。人形、お前の名前は？」

『私はユミル。母より始まりの巨人の名を与えられた災いを穿つ杖。これより我が主、赤枝基一郎の剣となり、鎧となりて、主が前に立ちほだかる全ての禍を払うことを誓います』

「……お前の願いを叶える事を、俺自身の誇りにかけて誓う」

『主よ。貴方が求める”言葉”を。その言葉を以って、我らが契約の徴とします』

「……”愛と平和”」

人が求めて止まず、決して永遠には得られない。そう、赤枝が信じるもの。

『本当に、主は皮肉家なのですね』

「悪かったな」

白い人形と、赤枝の右手の甲に、光が疾った。

刻まれたのは、”愛と平和”を躰わす魔術文字。

痛みはなかった。ただ、日常との決別の痛みを、感じた。

ユミルは、鋼の掌で赤枝を掬い上げ、後頭部へと誘った。

人間で言えば延髄に当たる部分に、コックピットへの入り口があった。

(……水?)

往年の飛行機の操縦席のような、数百近い計器類を想像していた赤枝は、少し拍子抜けした。

人形の胎内に設えられた操縦室には、ただなみなみとした水だけが満たされていたから。

入り込む。

酸素はあるようだ。息はできて、身体も少し動かせる。

実際に動かしたときの振動が心配だったが、あれほど強烈に輸送車に跳ね飛ばされた深緑の人形が起き上がり、奇声をあげて棍棒で踊りかってくる。

あれと同じかどうかはわからないが、おそらく操縦区画の衝撃等への対策は、相当万全に施されているのだろう。

赤枝は、魔術文字右手の甲に導かれるように、周囲に浮かぶ明滅する文字に触れてゆく。

太陽が、ついに沈む。

黄昏は終わり、星星の煌く蒼い夜に招かれるように、赤枝と白い巨人は立ち上がった。

『「第五位契約神器——万能戦術兵器”雪巨人・《愛と平和》”——起動！』』

9

「イヒヤヒヤヒヤ、死ネ。死ネ。ゴミはキエウセロオオオ！」

起動と同時に、赤枝が行ったのは回避運動だった。

深緑の巨人が、叩きつけてくる凶器を、右後方に飛びのくようにして回避する。

（感覚と素子が、思考と行動がリンクしている？）

水の中にいるはずなのに、吹きつける秋の風を、空を切る棍棒の唸りを、外れた棍棒が穿つ地の震えを、己がことのように感じていた。

先ほども、文字を介さずに、ただこちらの方に避けねばと念じただけだ。

赤枝は、白い巨大な人形を、まるで己が手足のように自在に動か

す事ができた。

『はい。この雪巨人を動かすのは、私と貴方の意思です』

「便利じゃないか。だけどっ」

次に撃ち込まれるのは、石弓の射撃。

赤枝がかわした重い鈍器の弾丸は、轟音と共に、近くの商店の外壁に突き刺さり微塵に破壊した。

幸い、舞い落ちた破片はブルースの方には届いていないが、いつまでもこのままというわけにはいかないだろう。

「避けるばかりじゃ埒があかない。何か武器はないのか？

こう頭部から機関砲とか、目からビームとか、腕が飛んでつて殴るとか」

『雪巨人には、使用者に合わせて変化する固定武装が装備されています。』

創造してください。我が主。貴方の闘争心を顕わす、唯一無二の武器を』

唯一無二の武器？

赤枝は一瞬、躊躇した。

武器と言うと、やはりオーソドックスなのは剣だろうか。

いや、槍もあるし、斧とかも破壊力がありそうだ。

冷静になれ、強いのは射程がある銃だろう。

いや、残弾を気にして戦えるのか？ そもそも俺は射的で当てた試しが一度もないだろう？

意表をついて鞭とか、バットとか。

そう言えば昔、トンカチが必殺技なロボットアニメがあったなあ。急に想像しろと言われても、迷うものだ。

そういえば、さっきなんて思っただろう。

ブルースを助けるのに、金槌子があったら便利だな、と。

瞬間、水の中の赤枝の甲から文字が溢れ、閃光と共にひとつの武

器を創り上げた。

同様に、雪巨人にも、大きく長い、同じ得物が握られている。

「って、何だ。この”バールのようなもの”は？」

『主が望まれた武器です。棍棒、でしょうか？』

「……どここの左翼の内ゲバだあつ」

赤枝は、深緑の巨人が叩きつけてくる棍棒を、”バールのようなもの”で受け止めた。

雪巨人と同色の白色に塗られた鋼の棒は、深緑色の金属の塊を見事に支えて見せた。

「ああ。いいさ。どうせ俺にはヒーロー役など似合わないっ」

白い巨人は、深緑の巨人の腹を蹴り上げた。

赤枝は、足に鈍い痛みを感じたが、補正されているのか、それほどの衝撃は無い。

一方で、深緑の巨人は有り得ないものでも見たかのように、一瞬動きを止めて、もう一度棍棒で殴りかかってきた。

「ユミル！？ 操縦者を殺さずに無力化するならどうすればいい？」

『頭部を破壊してください。ゴーレムは、頭部に制御中枢が集中しています』

「了解！」

赤枝は、一歩下がって敵の打ち下ろしをいなすと、右の逆手でバールのようなものを持ち直した。

フルスイングで、甲冑の兜を殴りつける。

金属のひしゃげる音がして、引きちぎられた油と板片を撒き散らし、頭部が歪んだ。

「イヒヤヒヤヒヤ、お、オカシイ。

おでは正義ノミ方。王国人は悪。ゴミ、ゴミ、ゴミはけさナキヤ

ア。ソウジイイー!!」

頭部から火花を散らして、深緑の甲冑が逃げようとする。違う。よりにもよって、倒れて動けないブルースを狙って、石弓を放とうとしていた。

考えるよりも先に、赤枝の身体は動いていた。

深緑の巨人が矢を放つ前に体当たりして射線をずらし、回り込んで左の肘うちで凶器を叩き落す。

右の前蹴りを浴びせて棒立ちにさせて。

「穿て。俺の拳っ!」

半壊した兜部を、狙いすました正拳突きで撃ち抜いた。

ユミルの助言は正しかった。頭部をもぎとられた人形は、力を失って倒れた。

音声素子を介さない狂笑が、いまなお続いていたから、操縦者はまだ生きているのだろう。

『主。武器は、いらなかったかもしれませんがね』

「……いるだろう」

赤枝は、拳を開いて、見た。

精密さが要求されるはずのマニピレータが、あれほど荒い使い方をしたにも関わらず、問題なく動いている。

つまり、この人形を作った製作者は、徒手空拳での格闘戦を行うことを想定した上で、この巨人を作り出したのだろう。

(何か、ひっかかる)

思えば、最初に追いはぎにあったときから感じていた違和感。異世界だからと見逃していた、ひとつの空白。

（殴られたり蹴られた瞬間、追いはぎもあいつも困惑していた。
まるで、こんな攻撃は見たことが無いとでもいうように）

日本ほどではないにせよ、様々なサブカルチャーが商売として成立するこの王国で、無手護身術の看板だけはみかけなかった。

それにもかかわらず、人型兵器のマニピレータには打撃を可能とする謎。いったいこのギャップは、何故だ？

「そんなことよりっ」

赤枝は、あれほど動かすのに苦労した御者席を巨人の指二つで軽々とよけて、気絶したブルースを左手で掬い取った。

まだ息がある。身体も温かい。

安心して息を吐くと、ぼこりと、水の中で大きな泡が浮いた。彼を死なせはしない。

「医者に行く方が先だ」

地を蹴り、加速する。

足裏部と、背中部に隠されていた排気口から、冷気の固まりを噴射して、雪巨人は道路上を滑空した。

（己が手足のように、なんて、間違いだな。この人形、人間以上の動きが出来るのか）

速度が上昇する。

おそらく、すでに時速100kmは越えているだろう。

（ひょっとして、音速巡航まで可能なのか？）

遠方に、深緑の人形を二機確認する。

馬鹿笑いをしながら、町を破壊しているようだ。

この速度なら、間合いは一瞬で詰まる。

「ウヒヤヒヤヒヤ。コワレロ。こわれろお。」

「へへへ。ど、どうせ高飛びをするんだ。」

王国人をコレだけ殺したんだから、ナラールじゃきっと英雄だな」
「どけええええ」

すれ違いざまに、ボールのようなものを突きこんで一方の頭部を破壊し、もう一方を金槌子のカギ爪をえぐりこんでもぎ取った。

『主。速度を抑えて。これ以上上昇させれば、衝撃波を作りかねません』

「ユミル、空は飛べないのか」

『そこまでは、残念ながら』

「残念だ」

町はもう少しだ。

鐘の音も近い。赤枝は、病院へ向かって、速度を落としながら、滑空を続けた。

「どういうことだ。反応が四つ消えた？」

ナラール本国より派遣された作業員で、此度の強奪作戦の指揮官でもある男。

キリル・フラムチェンコフ大尉は、乗機のコックピットに浮かぶ文字を読んで、不快気に眉をひそませた。

別に、ゴーレムに乗った搭乗者達の身を案じての事ではない。

彼らは、最初から陽動目的の使い捨てだった。

いくら王国が平和ボケしていても、自国から契約神器<アーティファクト>が盗まれれば、大問題になる。

だから、代わりのネタを用意してやればいいのだ。

麻薬に犯された前途ある若者が起こした重大事件。

政府を叩くネタに飢えたマスコミは喜んで食いつくことだろう。政治家や役人にもすでに手は回している。

どれだけ真つ当な政治家や官僚がいても、一部の欲に従順な犬がいれば工作は容易い。

今度の事件は、＜アーティファクト強奪＞ではなく、一部の若者が犯した人災で処理される。

偽名を使え、国籍を伏せる事の可能な、王国だからこそ効果的な手段。

いつものことだ。

ナラール・ナロールに関わる重大事件が起こると、王国でいつも野盗や暴力団による銃撃事件や抗争が突発的に起こってきたように、この事件も迷彩によって処理される。

万が一ナラール・ナロールに火が飛べば、逆に王国政府を非難する準備も、在ナロール組織、在ナラール組織だけではなく、本国までこみで出来ていた。

が、どれほど迷彩が上手くいっても、アーティファクトを奪えなければ意味が無い。

「忌々しい。なぜ輸送車の反応まで消えたのだ！」

その時、彼は見た。見てしまった。

木造建築の狭間、視覚素子の望遠能力で捉えた白い人形の影。

あれこそが、西部連邦共和国のヴァイデンヒュラー軍閥が、ナール国に強奪を勧めた標的に違いない。

「逆に奪われただと。なんという失態だ！」

もはや隠れ潜む猶予はなかった。

潜んでいた光学迷彩の魔法陣から飛び出し、キリル・フラムチェンコフは、白い巨人に猛然と襲いかかった。

第五話 暗殺人形は銃声の唄を奏でる

第五話 暗殺人形は銃声の唄を奏でる

10

「ひとつも……のこさない……」

イスカ・ライプニッツは、遠方にある木造ビルの屋上を転々と移動しながら、王国警察が集めた警備用ゴーレムや、機動隊の人形駆動車を狙撃して、悉くを破砕せしめた。

彼女の対物狙撃銃は、魔術に頼らずとも2000m先の標的を撃ちぬける、この世界で最長の射程を誇る携行兵器だ。

敵がどれほどの人員が集めても、生身ではキリルが用意した青銅巨人に太刀打ちできない。

「つよくなる……。つよくなって……パパにあいにいく」

イスカが引き金を引くたびに、スコープの中の人形が、手脚をとばし胴に穴をあけて倒れ、輸送車は横転する。

こうやっておもちゃをこわせばこわすほど、ヤーコブはかせはよろこび、ほめてくれるだろう。

そうすれば、もういちどパパにあえるかもしれない。おおきなてのひらで、なでてくれるかもしれない。

王国の打倒？ 大陸の新しい秩序？ そんなものはどうでもいい。ただ父親に逢いたい。そんなささやかな願いだけが、イスカの望みだった。

紫色に染まった遠くの空から、街中の学校に向けて、鳥型の人形輸送機が降りてきた。

射程はぎりぎり。一撃で撃ち落せるかどうかは難しい。

だから、灰色熊のぬいぐるみ、ベルの助言に従い、イスカは特別な弾頭を使った。

氷の魔術が封じられた魔術弾――。

イスカが射出した弾丸は、中空で飛散、巨大な球状の魔法陣を形成した。

直径20mに達する魔法陣は、つららをばら撒きながら爆発し、鳥型輸送機を飲み込んだ。

後は大地に叩きつけられるか。空中で分解し、墜落するか……

「いけません！ イスカ。ターゲットは無事です。次弾を、いえ、迎撃の用意をつ」

白い霧に包まれて、輸送機を守るように、巨大な盾が広がっていた。

明滅する魔術文字によって描かれた、円形魔法陣の盾は、爆風と氷柱を受け止めて揺るぎもない。

こんなものを作れるのは、イスカと同じ――

「盟約者が来ますっ」

アイディフラクト
契約神器の使い手のみ！

「……」

白いローブにすっぽりと顔を隠し、イスカは弾倉に残る残弾を次々と射出した。

空中に足場となる魔法陣を展開し、王国の盟約者は、まるで水をきる石のように、イスカへと迫ってくる。

鋼鉄の装甲をも容易く穿つ銃弾は、王国の盟約者がもつ巨大な半円の刃と魔術文字の盾に弾かれて、損傷を与えられない。

（強い。私と同じ『ラグナロク神焉戦争』からの生き残りか）

契約神器は魔術道具と違い、自身の意志と世界樹から魔力をくみ出す核を持っている。

戦えば戦うほど攻防は洗練され、破壊すればするほど対象から魔

死と災厄をもたらすためだけに育てられた殺戮の人形。彼女を引き取った養父は、三つの約束を誓わせ、枷を嵌めた。

ひとつ、仲間を殺してはいけない。

ひとつ、己に武器さつゐを向けていない相手を殺してはいけない。

ひとつ、死を辱めてはいけない。

イスカは誓いを守るだろう。

逃げ遅れた民間人がまだのこっている可能性がある以上、ナラーの荒野で使ったような強行制圧手段は使えない。

そして、ベルゲルミルも知っている。誓いの破棄が、イスカを人間以外のモノに貶めることを――。

「イスカ。逃亡を最優先。射撃は控えてっ」

「……ン」

イスカは襲い来る刃を徹甲弾で狙撃して、どうにか斬撃を交わしていた。撃つても撃つても刃の数は、増えてゆく。十六夜月、立待月、居待月、寝待月……。ビルとビルの間を潜り、時には魔法陣を使って屋上へと跳びあがり、誰もいない街をかけて、敵盟約者を誘導する。

海岸に近づけてはならない。これだけの強さの敵だ。ゴーレム如きでは瞬殺される。

イスカが逃れたのは、郊外の街奥にある小さな森。そこに作られた小さな墓場だった。

「んふふふ。つーかまえた」

「イスカっ」

不意をつき、死角となっていた木陰から、半円の刃をもった女が飛び出してくる。

気配をまったく感じられなかった。投げつけた無数の刃を囿に、

なんらかの魔術で自身を迷彩し、接近を図ったのだろう。

間一髪で刃を逃れるも、ローブはまっぴたつに避け、迷彩服をきた少女の顔があらわになる。

「この街は、私の庭みたいなものなの。さあ降参しなさい……って子供！」

半円の刃をもつ、とび色髪の盟約者、ジェニファ・ポプキンスは、イスカ・ライプニッツの素顔に絶句した。

どう見ても10の齡に届かない幼い子供。こんな相手が警備のゴレムを破壊し、輸送車を炎上させ、多くの警官達を殺傷したというのか。

「……貴方を逮捕します」

長い沈黙のあと、ジェニファがようやく吐き出した言葉。

許せなかった。どこのどいつか知らないが、こんな子供をテロリストに仕立て上げた誰かが許せなかった。

ジェニファは、赤褐色の瞳に怒りと悲しみをこめて、言葉を続ける。

「武器を捨てて。盟約者が相手なら、威嚇なしの攻撃も認められているの。」

絶対に、悪いようにはしないから」

イスカは、無言で、腰に差したナイフを引き抜き、切りかかった訓練されていたから。相手の甘さには、躊躇なくつけこめ。それが王国人相手の鉄則だと学んだから。

「やめなさい。貴方は、騙されてるのっ」

通じない。ジェニファは器用に半円の刃を回して、ナイフを弾く。それならば、と、イスカはナイフを投げつけて、作った一瞬の隙をついて、ジェニファに対物狙撃銃を向けた。

「このきよりなら……、はずさない」

「駄目ですっ、イスカ。その弾丸では私達も巻き込まれます」

「貴方、死ぬつもり？」

ジェニファは、先ほど空中輸送機に飛んできた魔法陣の砲撃を思

い出し、背筋を震わせた。

彼女の神器で、もう一度受け止められるかは、五分と五分。でも、奇妙なぬいぐるみにイスカと呼ばれた娘は、確実に死ぬ。

「パパにあえないなら、いきてもしかたがない」

彼女の顔は、怒りも悲しみもなくて、ただ透き通って綺麗だと、ジェニファは思わず見惚れた。

大地を踏み抜く。止めるために。

でも、すでにかけられた指を止める事はできなくて。

イスカ・ライブニッツは、引き金をひいた。

11

『パラディース教徒は神に選ばれた徳高き存在であり、奴隷のように労働で汗を流す下品な真似をしてはならない』

西部連邦人民共和国で信仰されるパラディース教の教えのひとつである。

残念ながら、こういった価値観は珍しいものではない。赤枝たちの世界でも、我々は白人だから有色人種を働かせるべきだ。とか、我々は大衆を導くエリート市民であるため、愚鈍なる大衆こそが働くべきだ。とか、我々は官僚なので（略）、我々は組合員なので（略）、我々は団体（略）。

ともあれ、パラディース教団にこういった考えをもつものが現れたのは、自然な流れだろう。

『我々は高貴なる存在なので、自ら手を汚すべきではない。戦争や粛清といった穢れた行為は、相応の道具が行うべきだ』――

——と

こういった教団幹部たちの需要にこたえるため、共和国では、古来から暗殺者を育成する機関がいくつも作られてきた。

主要軍閥のひとつである大都市シャンファの主、マルティン・ヴァイデンフラーの資金援助の下、ヤーコブ博士たちが実行した殺戮人形計画もその流れを汲むものだ。博士たちは、共和国内で誘拐された赤ん坊や戸籍のない赤子を買取り、標的を殺すためのだけの道具として、徹底的な教育を加えて上げた。こうして「製造された」人形達の心に倫理は無く、殺人に対する禁忌も、哀れみや慈しみといった余計な情愛ももたなかった。

そもそも自我がないのだ。彼らは均一化され、同じ思考をもつことを強制され、主のため道具として使い捨てられることを、常識として受け入れた。その上で、万が一の反逆もないように、身体には外科手術で爆薬が埋め込まれ、徹底した精神束縛の魔術で心を縛られて、殺すという技術のみを刻み込まれた。

第一ロットの最年少固体が八歳になった時、出荷前の最終品質確認試験が行われた。

試験任務は、当時ヴァイデンヒュラー軍閥にとって目障りだった、「紅い道化師」と呼ばれる別軍閥の工作員を暗殺すること。事前の調査によれば、標的は、女にだらしく大酒のみで、定まった住処を持たない流れ者。槍術が得意で格闘戦に秀で、魔術の心得もあるが、アーティファクトは所持していない。——まさに手ごころな暗殺対象だった。

20体の殺戮人形達は、入念な準備の上で万全を期し、幾重もの罠を張った上で、森での野宿していた標的を計画的に襲撃した……が。

「こんな魂のこもらん刃や魔術で、この俺様が倒せるかああああ」
ニードル・ゲレーゲンハイトという名の遺跡荒らしは、たった一

人で全員を返り討ちにしたあげく、人形達をそのまま解放した。

「別れ際の言付けは、

——男は二度と来るなよ。次は容赦なくぶっ殺ス#から。

——女の子は勿論、何度来てもオツケー。10年ぐらいしたら優しく抱いてやるからなあ。

であつたということです」

助手の報告に、ヤーコブ博士はしわの浮いた額をゆがめ、白髪をかきむしって、研究所の黄ばんだ床板を蹴りつけながら、地団太を踏んで憤激した。

「ワシの育てた人形達が、一矢も報えずじゃと！？ 色仕掛けはどうしたのじゃ？」

ヤーコブ博士の言うとおり、仮に襲撃に失敗したとしても、計画には保険があつた。相手は名に背負う色狂いだ。床で殺すくらいわけもないはずだった。

「12体全員が別個のやり方で誘惑したものの。

——餓鬼には欲情できん。もう少し、しおらしさを学べや、な。

と諭されたそうです」

眼鏡を光らせて続けられた助手の報告に、ヤーコブ博士は天を仰ぎ、男泣きに泣いた。

「お、おのれ、ワシのロマンをつ、レーゾンドールを否定するつもりあ」

「は、博士っ？ お氣を確かにつ」

「そうじゃ。男は？ フッフ。きゃつめ、漁色家は仮の姿、実は少年愛者じゃったか！」

博士があまりに自信満々だったので、『だったら始末できてますよ』と、助手は指摘できなかった。仕方なく、棒読みで報告を続ける。

「8体が仕掛けたものの、全員が失敗。『ニードル・ゲレーゲンハイトによる、よい男になるための3千の約束』という半日に及ぶ講義をみっちり聴かされたようです。……精神汚染は重度のものです。

救護室の中でも、まるでノイローゼのように約束を繰り返しています。

博士宛にも、講義を記録した水晶が届けられていますが、ご覧になりますか？」

「いらんっ！ 嫌がらせか！」

ガシャンと、送りつけられた記録媒体を床に叩きつけ、ヤーコブ博士は深く重いため息を吐いた。

「ワシらの計画の何が失敗じゃった……？」

「ひとつに、標的が悪すぎたというのがあります。

人形達にかけた精神拘束の魔術と、間接部に埋め込んだ炸薬が、完全に消滅させられていました。

異物とはいえ、肉体に癒着し精神に融合したものを、何の外的痕跡や内的後遺症を残さずに消し去るなど、我々にも、いえ、神器使いであるうとも不可能です。

我々は、ニーダル・ゲレーゲンハイトを盟約者でないと侮っていましたが、彼は一流の、……怪物的なまでの魔術師です」

「相手が悪かっただけではあるまい」

ヤーコブ博士は、粉々に砕けた水晶を見下ろした。割れた破片が、鏡あわせのように向かい合い、何人もの博士の顔を映し出す。

「怖れながら、価値観も同じ、思考法も同じなら。

同じ陥穽におち、同じ弱点を衝かれ、同じ攻略法で撃破されます。身長も体重も性別も異なるものたちに、同一の存在である事を強いたのが、間違いだったのかもしれない。

彼らは人形ではなく、……人間なのですから」

「減点じゃ。彼らは人間ではなく、人形じゃよ。

なぜなら、マルティン・ヴァイデンフラー前主席教主が人形を望んでいるからじゃ」

真実も、正義も、道徳も、あらゆる定義は、教団上層部の意向が優先される。

それこそが、この世に平等と繁栄の楽園を約束する、パラディー

ス教の教義なのだから。

「じゃが、道具に缺と七輪があるように、多少の個性は許されよう。再度、精神拘束の魔術をかけて、個別に修行に送るとしよう。

師匠候補となりうるヴァイデンヒュラー軍閥の暗殺者と魔術師をリストアップしておけ。

前主席教主様には、ワシが掛け合おう」

「はっ」

命を受けた助手が部屋を退出しようとしたとき、ヤーコブ博士はいたずらっぽい笑みを浮かべて彼を止めた。

「待て。20号は、ニーダル・ゲレーゲンハイトの元へ送れ。

あれは成績こそふるわんが、こう鞭打つとな、怯えた色気のある目でワシを見上げるんじゃ……。

ニーダルよ、貴様も幼女の魅力に溺れ、十字架を背負うがいいわっ、ヒョオッホッホッ」

「博士、目的がかわってませんか……」

「うるさい。減点、減点じゃっ」

「ひええええっ」

博士の思惑はともかく、なんとなく大丈夫だろうと助手は、あたりをつけた。

ニーダル・ゲレーゲンハイトは、巷で噂されているほど悪人でも常識知らずでもない。

少なくとも、自分達よりは——と。

彼の予想は、なかば的中し、なかば斜め上に外れることになった。

一年後、ニーダル・ゲレーゲンハイトから送り返されてきた20

号は、否、イスカ・ライブニッツ・ゲレーゲンハイトは、第六位級
アーティファクト
とはいえ、契約神器の盟約者となっていたからだ。

「き、きゃつは馬鹿かあああ」

助手の報告に、ヤーコブ博士は土気色した顔を真っ赤に染め、白

髪を逆立てて、研究所の黄ばんだ床板を踏み抜きながら、地団太を踏んで激昂した。

「ニーダル・グレーゲンハイトが、潜っていたライブニッツ遺跡で発掘した神器を修繕し、20号に与えたそうです。」

——遺跡探索は共同作業だから、お前の取り分だ、と。

信じられません。契約神器をひとつ教団に献上すれば、家どころか街ひとつ、いえ、それ以上のものを与えられるでしょう。それほどの宝を、自分を殺しに来た子供に与えるなど、狂気とは思えません。彼は、馬鹿です。大馬鹿者です！」

眼鏡にひびを入れて続けられた助手の報告に、ヤーコブ博士は穴の開いた床と土で汚れた靴を見下ろしながら、がつくりと脱力した。「契約神器を20号から奪うことは、出来るじやろうか？」

「不可能です。契約神器の意志は、20号を我々の攻撃から全力で守るでしょう。」

盟約者でないものが、盟約者と戦っても、勝てるみこみがありません」

「契約を破棄させることは、どうじゃ？」

「20号から聞き出した契約の内容は、母たる魔女を守るという不可解なものです。」

破らせるには意味が不明ですし、仮に我々が契約の破棄を強要していると判断されれば」

「我々が神器にとって排除の対象となるか。」

忌々しいものじゃ。これで20号は、道具でありながら、道具ではなくなつた……」

それは偶然の出会い。ほんの小さな気まぐれが重なって吹いた、変化の風。

「NO・20です。きょうからいちねんかん、アナタのオモチャとなります。どうぞジユウにおつかいください」

ヤーコブ博士に教わったとおりに服を脱ぎ、白い裸身をさらした20号に、ニーダルは纏っていた赤い外套を投げつけた。

「……ったく、ドクトル・ヤーコブめ。なんて悪趣味な教育をしゃがる。いいか、俺の言いたい事は二つだ。

ひとつ、服を着ろ。俺はロリコンではないので、お前に裸になられても、近所の子を銭湯へ連れてくみたいで落ち着かん。

ふたあつ、お前は道具オモチャじゃなくて人間だ。覚えてないんでさあっぱりわからんが、人間を人間扱いしない宗教やら思想やらが、俺は心底嫌いだった気がする」

「でも、NO・20はドウグなのです」

「ああわかった。だったら今日から一年間、お前は俺の娘だ。これは命令だ。拒否は許さねえ」

「??」

赤い外套にすっぽりと包まれて、20号は何を命じられたのか考えた。

「ちゃんとした名前もつけてやらねえと。ガキをナンバーで呼ぶな、マッドサイエンティスト破綻者ども。」

クソじじい（エーエマリツヒ・シュターレン）……にや任せられねーな。俺にゲレーゲンハイトなんて姓つけやがるし。皮肉かったの。……あん？」

20号が、いや、先ほどまで20号だった「期限付きのニーダルの娘」は、父親に飛びついた。

「……パパっ」

「……い？」

「パパっ……パパっ……パパっ……」

ニーダルは、すぐりつく少女を抱き上げた。崩れかけた遺跡天井の割れ目から、空を飛ぶ名も知れぬ野鳥の姿が見えた。

「今日から一年間、よろしくな。イスカ・ライプニッツ。俺の娘」

運命の風は、確かにイスカ・ライプニッツの扉を叩き、未来への

道を解き放った。

第六話 乙女は道化師の過去を追う。……あるいは偽造された身分経歴（カバ

第六話 乙女は道化師の過去を追う。……あるいは偽造された身分^{カバース}経歴を。

1
2

イスカとは、ニーダルの故郷にいる鳥の名前だという。

ニーダルは一年間、イスカに遺跡探索の為のスキルを教え、掘り出したアーティファクトを与えて、ヤーコブ博士達の下へと送り返した。

家族ごっこは終わり、かつてと同じ、殺戮人形としての血にまみれた生活が始まったが、以前と変わったこともあった。イスカの隣^{アーティファクト}に契約神器の意志を宿す灰色熊のぬいぐるみベルゲルミルがいることと、彼女自身の胸の中に小さな、確かな夢ができたことだ。もう一度、ニーダルに逢う。その為に生きて、戦い続ける——。だから、ジェニファ・ポップキンスの降伏勧告など受け入れられるはずもなかった。

「撃つなあつつ」

ゆえに、イスカは引き金をひき、ジェニファの突進は間に合わなかった。弾丸は射出され、神器の意志たるベルゲルミルの遠隔操作か、あるいは弾頭に物理的・魔術的な衝撃が加わった時点で、直径20mに達する球状魔法陣を展開、周囲に氷柱をばら撒きつつ爆散する。二人とも逃げられない。生き延びられない。

せめて主を守ろうと灰色熊のぬいぐるみが即席の防御魔術を編み、ジェニファが覚悟を決めた瞬間、彼女は背後から何者かによって、イスカのいる前方の地面へと突き飛ばされた。当然のように、魔弾

は新しい闖入者に直撃する。蛮勇なる犠牲者は、身体に巨大な風穴を空けつつ、魔法陣に飲み込まれるはずだった……が。

「ジェン、『月夜』を使えっ。ベルは封鎖術式をつ。俺ごと封じろ！」

弾丸を受け止めた男の魂消るような絶叫は、かつてのジェニファ・ポプキンスにとって最も信用できる声のひとつであり、ベルゲルミルの主が最も信頼するただひとつの声だった。

「了解。術盾——”月夜”——起動！」

ジェニファの持つ半円形の巨大刃、第六位契約神器ルーンブレード『月夜』が、自身を複製しながら魔術文字を中空に刻み込んで飛翔、イスカと自身を守るための巨大な円形魔方阵の盾を創り上げた。その後方から、衝撃を受け止めるためのベルゲルミルが繰り出す鎖が、赤い外套を着た闖入者を幾重にも包み込んだ。

直後、爆音と衝撃が墓場の入り口を揺るがし、何本もの木々が悲鳴をあげるように倒れた。

そして、赤い外套を着た誰かは、黒い長髪を霜で凍らせた濡れねずみの姿で、べちゃりと潰れた蛙のように、すり鉢状にえぐれたあぜ道に倒れこんだ。

「死ぬかと、思ったぜ」

「あれで死なないとは存外にしぶとい」

「うるせーぞ性悪熊。煮て喰っちまうぞ」

「そんなにも飢えて、カルシウムが足りないんじゃないじゃありません？」

ジェニファ・ポプキンスは信じられなかった。

目の前でぬいぐるみと掛け合い漫才をしている赤い外套の男を、彼女はよく知っていた。生きている事も、今この国に来ていることも、情報を得た。けれど、本当に再び会えるなんて、信じられなか

った。

それは、イスカ・ライブニッツにしてもそうだった。生あるうちに、もう一度彼と巡り会えるとは、信じてても信じてても、信じられない夢だったから。

「パパっ…パパあっ…パパあっ…」

少女は父親と呼ぶ男に抱きつき、胸に顔をうずめておんおんと泣き出した。

赤い外套のろくでなしは、ふしくれだった指で人形のような少女の亜麻色髪を梳りながら、よしよしなんて言っていた。

二人の抱擁を見て、ジェニファ・ポプキンスの胸のうちを、吹雪のように冷たい何かが吹き荒れた。

「ねえ、聞きたいんだけど、どうしてアナタがここにいるのかな？」

赤褐色の瞳に冷え冷えとした殺気を宿して笑う、とび色の髪をひとつにくくった警官に、ニーダル・ゲレーゲンハイトは、あいまいな表情を浮かべた。

思わず飛び出してしまったが、ニーダルはジェニファ・ポプキンスにだけは、出会っては不味かったのだ。

（く、クソじじいめ）

それは、数日前のこと…ニーダル・ゲレーゲンハイトは、食客として世話になっている軍閥の主、万人長エーエマリッヒ・シュターレンの自室に呼び出された。

「ニーダル、王国に行ってくれないか？」

「嫌だ。じゃ、そうゆうことで」

開口一番に部屋を出ようとしたニーダルに、灰色の混じった栗毛

そんなこんなで一騒動あったのち、ニーダルは絨毯の上に正座で、エーエマリツヒの話を聞く羽目になった。

「君も知つての通り、今、大陸は、いやこの世界はテロとの戦いに入っている。」

大陸、浮遊大陸を含めて世界七〇ヶ国以上が、大量破壊兵器拡散に対する安全保障構想（PSI）に賛同し、対外公約に掲げて、化学・生物・放射性兵器や契約神器のテロリストへの拡散を阻止すべく、各国が連携し、関連物質の移送や関連技術の移転を防ごうとしている。

具体的な連携としては、国際法・国内法の枠内で、各国が軍・警察・沿岸警備隊・税関・情報機関を動かし、情報交換を促進と阻止行動の実行だな」

「我らがペコンの中央政府も、テロリスト鎮圧の名目で、少数民族を弾圧、独立運動や抵抗運動を虐殺してるよなあ。わっはっはっ」
「茶化すな。ニーダル。……王国の一部政党が、この拡散防止の枠組みから王国を外そうとしている」

「はっはっはっ。はあああっ!？」

ニーダルの目が点になった。彼の記憶が確かなら、王国は今世界の安全保障において、経済面・軍事補給面において少なからざる貢献をしていたはずだ。そこから外れる……？

「魔法石が産出される中東海地域の安全保障に、王国が補給艦隊を派遣していただろう。あれの根拠となる時限法律の継続を阻止すると公言している」

「……………」

ニーダルは虚空を見つめたまま、現状の国際関係、および共和国、王国のデータをねじり合わせた。

「ははははははははっ。そおいつは面白い!」

今、この世界で一番凶悪なテロリストは豊穡の神々であるヴァン神族の教えを曲解した「聖戦の基地」と呼ばれるネットワークだ。

彼らは各地で自爆テロやら馬車爆破テロを行い、時には航空輸送人形機をも爆破する。「聖戦の基地」との主戦場となつた中東海地域で、浮遊大陸アメリカやイルヘイム連合諸国らが派遣した多国籍軍とともに主力となつて相対し、民間人を守っているフリーヤスタン国の部隊に補給しているのは、他でもない王国だ。王国が抜ければ、フリーヤスタン国は軍を維持できず、自国のためにテロとの戦いから撤退するだろう。最前線を担っていた中核部隊が消えるのだ。中東海情勢は一挙に悪化する。

「魔法石の値段がまあ上がるなあ。『聖戦の基地』の活躍で、中東海の安全が悪化したこの五年で、魔法石の国際価格が4倍に跳ね上がったが、その水準でとどまらねえ。何せ海賊やらテロリストどもが遊び放題だ。そういやあ、浮遊大陸アメリカや派遣された諸国の軍隊が、西部連邦人民共和国製の武器や兵器でテロリスト達が武装していただの、海賊の中に共和国の軍人崩れを見つけただのって報告をあげてたが、あつちはヴァイデンヒュラー系の軍閥だったかあ？」

ナラール・ナロール国と密接な関係をもつ王国の一部政党に、目の利益しか見えないヴァイデンヒュラー系の軍閥が圧力をかけたのか、あるいは政局を望む王国勢力の独断か。

「ナラールの無能元帥が籠絡した王国議員に積極的な圧力をかけているそうだ。

あの無能のせいで困窮したナラールは、中東海地方のテロリストに自前の兵器を売ってたがつているからな。熱核兵器の共同研究工場建設を中東海のシーラス国と交渉中という情報もある。

彼らが安全に密輸するためには、王国の補給艦隊に支えられた中東海の多国籍警備部隊が障害となる」

「つくづく世界の平和にや邪魔な国だな」

「アブラハム・ベーレンドルフ主席教主も頭を痛めているよ。勿論、私もだが」

「中央政府のことだ。王国が撤退すれば、嬉々として補給艦隊を出

すんじゃないか？」

「我が共和国にまともな補給艦隊があるものか。そもそも海軍は未だヴァイデンヒュラー軍閥の影響が根強い。あの巡航飛翔弾事件を忘れたわけではあるまい？」

「忘れるかクソじじい。てめえのせいで、あの時俺は死にかけたあつ！」

巡航飛翔弾事件とは、海軍の大將の首をすげかえて安心したアブラハム・ベーレンドルフ主席教主が視察に来た演習で、彼の乗艦に向かつて魔術兵器である巡航飛翔弾が誤射されたという事件だ。エーエマリツヒの指示で乗艦していたニードルは、何の因果か、散々暗闘してきたペコン中央政府の首魁を庇って、沈む艦艇から脱出する羽目になった。

「説明したら乗らなかつただろう？」

「当たり前だあつ！ あんな目に合わされて、俺が裏切るとは思わないのかクソじじいっつ！」

「大丈夫だとも。アブラハム・ベーレンドルフもマルティン・ヴァイデンフューラーも、君にとっては間接的な仇だ。

君はいい加減だが、絶対に筋を通す。間違つても、あの二人につくことはない」

「言つぜ妖怪じじい」

エーエマリツヒは、ノートウングを鞘に仕舞った。

「王国の一部政党がナラール・ナロール国籍の在留人達から多額の献金を受け、しかもそれが違法水準の可能性があることは、彼ら自身否定できていない事実だ。

今回の強奪計画は、ナラール国の覇権を確立させるとともに、王国を恫喝し、ヴァイデンヒュラー軍閥とナラール国の支配下に置くことが目的だ。中東海の治安が一定水準に回復するまで、王国がテロルとの戦いから身を引くことは、共和国にとっても望ましくない事態を呼び起こす。

アブラハム・ベーレンドルフ主席教主も、王国が『世界の敵と認

定される』ことは求めても、制御不能な戦争の勃発は望んでいないのだ」

「アース信仰とヴァン信仰の対立か。どちらにも属さない王国という緩衝役が消えて、ヴァン信仰側にも関わらず、説得に応じて対テロ戦争に参戦したフリーヤスタン国が撤退すれば、最悪の場合、神焉戦争クラスの宗教大戦が勃発する可能性もあるってか。ふははは。そおっとなったら、ひきがねをひいた王国が世界中からどう思われるか、楽しくて仕方がねえ。

それにしても、王国のバカ政党様は、自分が「我が国は大量破壊兵器と契約神器の拡散防止はしない」と、世界中に唾を吐きかけたことに気づいているのか？ さしずめ『テロ支援国家』支援政党』ってところかあ」

ニーダルは正座をやめ、立ち上がった。

「じいさん。散々煽ってくれたが、アブラハム・ベーレンドルフもエーエマリツヒ・シュターレンも、実際のところ世界平和なんてどうでもいいんだろう。

中東海情勢の悪化と魔法石の価格暴騰は、西部連邦人民共和国の経済を失速させる。アンタ達はそれが怖いだけだつ。最初っから本音を出せ、クソじじいめ」

「それでも君は行くのだろう？」

「ああ。王国を滅ぼすのは、七つの鍵を握む、この俺だつ。王国の悪徳政党だろうと、ナラール・ナロールだろうと、他のヤツには任せん」

「時間がない。君に我が軍閥が調べ上げた情報を託す。アーティファクト奪取は阻止できないだろうが、事件の成立は、ナラール国の軍事強化を招き、共和国内部派閥、ひいては大陸の均衡を崩す。必ず破壊、もしくは再奪取して、彼奴等の手には渡すな」

「承った」

「ねえ、聞きたいんだけど、どうしてアナタがここにいるのかな？」
ジェニファ・ポプキンスに詰め寄られ、ニーダル・ゲレーゲンハイトは冷や汗をかいた。

本当の理由など話せるはずもない。だから、もうひとつの理由を正直に答えた。

「墓参りだ。ウィリアム・エリン先輩に会いに来た」

刹那、ジェニファ・ポプキンスの怒気が爆発した。髪が逆立ち、彼女の周囲を散りゆく無数の落ち葉が、真つ二つに裂けてゆく。

「そう、貴方が殺したウィリアム先輩の墓参りに来たんだ。ふざけないでっ」

ジェニファが、あぜ道を蹴って、半円の魔法刃『月夜』で、ニーダルに斬りかかる。イスカは狙撃銃を構え、後ろ手に伸ばされたニーダルの腕に阻まれた。

「パパ？」

「イスカ、撃っちゃ駄目だ。俺が戦う。……来いっ」

ニーダルが目前の空間に腕を伸ばす。炎が吹き上げ、穂先に三日月の刃がついた十文字鎌槍が召喚される。

ジェニファの半円刃の突進を十文字鎌槍の穂先で受け止めて、火花を散らした。武器の長さを取り回しの良さは、ニーダルの得物が上回るだろう。だが、ジェニファの神器は同一存在を複製できる。

後方へと跳躍した彼女の周囲を、十六夜月、寝待月……、複数の円刃が生まれて宙を舞う。

「もっと早く気づくべきだったのよね。アナタの槍同様、この世界の理から外れた長銃のデザイン。作ったのはアナタね」

「改造は神器自身と職人達がやったさ。俺は、アイデアを上げただけだ」

ジェニファは、俯いた。彼女の瞳から、一粒の涙が頬を伝い落ち、

ぽつりと、クレータとなつたあぜ道に落ちた。

「ジェン？」

「私の知っているアナタは、外道で鬼畜で、どうしようもない女たらしだったけど、こんな子に手を出すほど堕ちちゃいなかったよ」

「おい、ジェン、なんかめちゃくちな誤解してないか？」

「アナタは、その娘に殺しの業と銃を与えた。それだけで、十分」
ジェニファの半円刃が宙を舞いながら、増殖してゆく。

「普通の武器に毛の生えた程度の魔力付与武器^{エンチャント・ウェポン}だけで、契約神器と闘うつもりですか？」

イスカの狙撃銃の銃身にこしかけた灰色熊のぬいぐるみが、ニーダルに問いかける。

「出来るさ。俺は、イスカのパパだから、なっ」

「術剣——”月夜”——起動！」

ジェニファが、魔法刃の力を解き放つ。自らを圧殺しようと迫り来る剣の殺界に、ニーダルは十文字鎌槍を構えて飛び込んだ。

13

ジェニファ・ポプキンスが、ルドウィン・ハイランドに出逢ったのは、王国暦1100年のある冬の朝だった。

その頃のことは、あまり思い出したくない。彼女が仕官高等学校に入ったその年、王国は空前の大不況の真っ只中で、技術者だった両親は職を追われ、心労から相次いで他界した。いくら奨学金制度があっても、当時のジェニファに学費を払い続けることは不可能で、

退学は止むを得なかった。

だから、そんな自分を雇いたいという人が現れた時は、心底驚いた。

レイチエル・ストレンジャー。政財界に強い影響力をもつエンフオード家に繋がる新興企業『ヴァルキリーズ』の若き取締役。長い銀の髪と、青灰色の瞳。北風すらかすむ、凜とした立ち居振る舞いに圧倒されて、高校を中退したばかりの少女は恐縮するばかりだった。そうして、彼女に案内された応接室で、ジェニファはテーブルに置かれた古びた短剣を手にとった。

「……オマエハ、何ヲ求メル？」

それが、ジェニファと愛剣の出会い。

突如半円の大刃に姿を変えた魔剣と、予想もしなかった状況に呆然とするとび色髪の少女を放置して、レイチエルが悪戯っぽくウィンクしたのが、お茶を運んできたルドウィンだった。

「どう？　一発合格。私の予知もちよつとしたものでしょ？」

「へいへい。俺は可愛い子が入るなら、何でもいいよ。よろしくな」

「ちよつと、ルドウィン！　貴方は私の秘書なのよ？」

「……レイチエル。人選ミスだ。私物化はよくない」

「”私の”会社なの！」

「潰れる。そんなんじゃ、絶対潰れるから」

ジェニファ・ポプキンスは、この日を思い返すたび、苦笑いする。その日、試験を行ったのは、『合格』したのは、果たして誰だったのか？　と。

レイチエル・ストレンジャーは、予知の魔術を使って契約神器とパートナーたる盟約者を集め、全員を王国軍へ編入させた。

かくして、王国史上数百年ぶりとなる特殊部隊が設立される。第

604 技術試験隊。共和国に比して、圧倒的に遅れた契約神器および魔術兵器の研究を行う為の部隊。——歴戦の勇士であるロバート・アームズ大尉を隊長に、参謀部のウィリアム・エリン中尉を副長に迎えたこの部隊は、魔道を中心とする様々な試作兵器や実験技術の試験を行い、やがて王国と共和国の秘められた暗部にも関わって行くこととなる。

そして、王国暦1102年、最後の日。晩樹の月（12月）25日。

多くの人々の運命を狂わせた——王国大災害勃発——
|。

王国全土で同時多発的に連鎖して起こった大地震は、インフラと交通網を寸断し、遺跡を封じる封鎖結界すらも崩壊させた。そのため、大断崖や各地の古跡から、数多の怪物たちが地上へと侵攻した。王国暦1103年、生樹の月（1月）20日。アルター州にて救援活動に従事していた第604 技術試験隊に、大断崖から王国へ迫る怪物達を阻止せよという命令が下る。隊長、ロバート・アームズ少佐と、レイチェルの義弟ケヴィン・エンフォード中尉は王都へと召喚されて不在。また、救援活動中に負傷したジェニファは、作戦の参加を副長命令によって拒否され、後方の医療施設へ入院した。第604 技術試験隊は、相談役を務めていたレイチェル・ストレンジヤーとともに出撃し、二度と王国に戻ることはなかった。——
——ルドウィン・ハイランドの裏切りによって。

さて、ここから語るのは王国で真実と報道された結末である。
王家縁のアーティファクトである第二位契約神器ミストルティンと盟約を交わしたルドウィン・ハイランドは、いつしか自分こそが

王に相応しい存在だという妄想を抱くようになった。

そして、彼の理想とする「軍国主義国家設立のため」、大災害によって混乱した王国を制圧しようと仲間にもちかけ、断られた。激昂した彼は、制止するウィリアム・エリン大尉をはじめ第604技術試験隊全員と、運悪く同行していたレイチエル・ストレンジャーを惨殺、遺跡の怪物たちと共に王国へと攻め寄せ、アルター州サンフィス市の第8区を壊滅させた。死者四百余名。生存者は、わずかに少年ひとり。虐殺を目撃した彼は精神を病み、長い闘病生活を送ることになる。

ルドウィン・ハイランドは、第604技術試験隊の救援に駆けつけたケヴィン・エンフォードと8492機械化混成部隊によって野望を阻止され、遺跡のモンスターともども制圧されて、大断崖へ身を投げた。

軍人が災害を利用してクーデターを目論んだという醜聞は、王国軍人の士気と国民感情を地の底まで落とし込んだ。その後の調査によって、ルドウィン・ハイランドが戸籍も何もかも嘘っぱちな「存在しない人物」であったこと、クーデターを目論んだのが彼1人であったことが自室から見つかった計画書によって明らかになり、また彼を討ち第二位契約神器ミストルティンを持ち帰ったヒーローが、同じ第604技術試験隊のケヴィン・エンフォードであったことから、動揺は次第に収まることになる。これは王国軍人ひとりひとりの真摯な救護活動への姿勢とも無関係ではないだろう。

一方で、ルドウィン・ハイランドの名は「悪魔」と同義となる。伝説の黒衣の魔女もかくやという呪いを受け、忌まれる存在。巷では、第604技術試験隊の成果を悪用し、大災害を起こしたのすら彼の所業ではないかとまで囁かれるようになった。彼の野望を阻んだ「英雄」ケヴィン・エンフォード中尉は、その功績により二階級特進し、少佐へと昇進した。

時間は、すべてを埋めてゆく。

失ったものも、奪われたものも、日々の流れに埋もれて消えてゆく。

多くの死者を出した大災害は、ずさんだった王国の対災害姿勢を大きく前進させた。町は復興し、人々もまた前を向く。だが、忘れられない者がいた。失ったもの、奪われたものを思い、血の涙を流す者がいた。ジェニファ・ポプキンスは軍を除隊し、難関を謳われる国家公務員一種試験を突破し、公安警察へと入った。事件を調べるために。

おかしかった。大災害が起こった事までは、……受け止めよう。だが、なぜ第604技術試験隊は全滅しなかった？

『予め天変地異を考慮に入れたクーデター計画』とは何だ？ 『決行時に都合よく王都へ召喚された隊長』『定期的に風紀検査の入る自室に放置され、失敗後はじめて発見された計画書』……まるで後付のように、ルドウィン・ハイランドが『反乱を首謀した』状況証拠が揃ってゆく。そして、時を同じくして、王国軍のすべてから、彼がいた痕跡が消えた。まるで幻であつたかのように、全てのデータが破棄された。

仕事ではない私事の捜査は困難を極めたが、ジェニファはくじけなかった。だが、やがて受け入れざるを得なくなる。『事件後に』提出されたすべての証拠がルドウィン・ハイランドが無謀な反乱を企てたことを指し示していた。本人の自白すらあつた。ルドウィン・ハイランドは、王国暦1103年、霜雪の月（2月）1日に、上官の妻であり彼とは旧知の仲であつたセシリア・エリンが宿泊するアスター州のホテルを訪ね、ウィリアム・エリンを殺したのは自分だと証言している。彼がケヴィン・エンフォードによって追い詰められ、行方不明となつたのはその直後のことだった。

事件の鍵を握るアルター州サンフィス市第8区ただ一人の生存者に、ジェニファ・ポプキンスは逢いに行った。何度も面会を断られ、

会うことが叶ったのは、事件から三年が経ち、少年が退院してからだ。

「誰も信じてくれないから、いいです」

口を濁す少年は、ジェニファの熱意に根負けしたかのように、呟いた。

「あの人は、たった一人で怪物達に向かっていったんだ。

”一匹も先へは行かせない。ここは、あいつらが命をかけて守った俺達の国だ”って、そう言って」

全ては、謎のままに消えてゆく。

ルドウィン・ハイランドは、レイチエル・ストレンジャーとともに、ジェニファ・ポプキンスに生きる場所と誇り、喜びを分かち合う仲間をもたらし、……全てを奪い去った。のちに、彼が共和国へ落ち延びたという噂を耳にする。否、王国軍と外務省は確かな生存情報を掴み、握り潰していた。ジェニファ・ポプキンスは、共和国およびナラール・ナロールの組織犯罪を追う外事二課に異動を志願し、捜査員となった。

いつか、己の手で彼を捕まえるために。もう一度、……彼に会うために。

そして、遂に悲願は果たされた。最悪の形で。

幼いテロリストを追うジェニファは、戦友の眠る故郷の墓地で、「父親」と呼ばれる赤いコートを羽織った男と再会する。

容貌は変わり果て、昔年の面影も消えて、それでも確かにその男は、かつてルドウィン・ハイランドと呼ばれていた。

「ねえ、教えてよ？ ウィリアム先輩を、第604技術試験隊の皆を殺したのは、アナタ？」

ジェニファの声は震え、かすれていた。胸が、喉が、心が張り裂

けそうな程に痛い。

立っているのも困難なほどに、激情が肉体の内側を満たし、溢れだしていた。

「そうだ。——俺だ。俺がレイチエルを、ウィリアム先輩を、第604技術試験隊の仲間を殺した」

だからこそ、彼の返答は残酷で、一片の救いもなかった。

ジェニファ・ポプキンスの赤褐色の瞳から、涙が零れ落ち、止めること叶わなかった。

もはや言葉は要らない。求め続けた真実はあまりにも残酷だった。

「術剣——”月夜”——封殺！」

ジェニファが懐かしい応接室で受け取った半円の魔法刃、第六位契約神器ルーンブレイド『月夜』が、彼女の手から複製される。三日月、十日夜月、十六夜月、寝待月、立待月、居待月……、月齢に従い姿を変えた魔法刃の数は、全部で十二。その全てが空を舞い、360度全方位から、赤い外套を着た独りの男へと斬りかかる。球状に展開した魔法刃の結界に穴はなく、ただ対象を殲滅するのみ——。

この危機に対し、ルドウィン・ハイランドは、雑草の生えた墓地の大地を革靴で踏みしめ、十字鎌槍を一旋させた。アーティファクトは、通常の魔術道具とは比べ物にならない破壊力を秘めているゆえに、ジェニファは防戦ままならず倒れ付さるう、かつての友しか想像しなかった。360度全方位から、斬り込まれた十二の魔法刃、……その全ての軌道をずらすことで相打ちさせるなど、想像の余地外だった。

「あ——」

ジェニファに抱かれた半円の魔法刃を除き、ルドウィン・ハイランドの一撃によって、複製された魔法刃全てが追突して消失した。勝機を逃さず、十字鎌槍を正面に構えた彼が迫り来る。

（ああ、そっか）

ミストルティン。王国最強の神器のひとつを委ねられたルドウィン・ハイランドは、第604技術試験隊の中でも、最も秀でた戦士だった。隊長のロバート・アームズと、相談役のレイチエル・ストレンジャーを除き、誰一人として土をつけれない程に。それは、きつと神器だけでなく――。

（やっと私も、皆のところに逝けるんだ）

ルドウィン・ハイランドの槍が、ルーンブレイド『月夜』を叩き落した。ごつく厚い掌と腕が、背へと伸びて回される。そうして、彼は、ジェニファ・ポプキンスの身体をかき抱いた。

「お前には、俺を殺す理由がある。俺もお前になら、殺されていいだけ」

娘は、イスカは渡せない。

「眠りのルーン……」

ルドウィン・ハイランドは、ジェニファ・ポプキンスを抱きしめたまま、舞い落ちる枯れ枝を手に取り、炎で文字を刻んだ。

枝を髪に差し込まれ、ジェニファは急速な眠りに落ちた。意識が途切れる寸前、彼女の脳裏に浮かんだのは、くだらないかけあいをしながら、仲睦まじく寄り添っていたルドウィン・ハイランドとレイチエル・ストレンジャーの姿だった。

（何よ、結局、私がどれほど想ったって。アナタの中では、一番にはなれないんじゃない）

心に刺さる宿木のような棘は、ほんの少し嫉妬に似ていた。
ミストルティン

第六話 乙女は道化師の過去を追う。……あるいは偽造された身分経歴（カバ

拙作をお読みいただきありがとうございました。

なお、作中のアルター州サンフィス市第8区壊滅の真相につきましては、『人形』第3話をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6676n/>

七つの鍵の物語 - 【守護者】 -

2010年10月8日21時10分発行